

『ニーベルンゲンの歌』と
ハルトマンのアルトゥース・ロマン

石 川 榮 作

徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）第2巻 別刷

1991年3月

Journal of Foreign Languages and Literature

College of General Education

University of Tokushima

Volume II

March 1991

『ニーベルンゲンの歌』と

ハルトマンのアルトゥース・ロマーン

石川 栄 作

Das Nibelungenlied und die Artusromane Hartmanns von Aue

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Das Nibelungenlied, das von einem Epiker am Anfang des 13. Jahrhunderts gedichtet wurde, hat die höfischen Züge mit den damaligen Artusromanen gemein. Die Weltanschauung des nach seinem Stoff altgermanischen Epos ist aber ganz anders als die der Artusromane, deren Quellen aus den französischen Werken stammen. Wir möchten hier, die Vorstellungen von *êre* und *leit* beobachtend, das Nibelungenlied mit Hartmanns Artusromanen vergleichen, um die Eigenschaft des Epos in der mittelalterlichen Literatur klarzumachen.

Im Nibelungenlied verursacht die *êre* immer am Ende das *leit*. Der Falkentraum zeigt schon, daß Sifrits *êre* auch mit *leit* endet. Die hohe Minne Sifrits, im Gegensatz zu Gunthers Fall zur *êre* gesteigert, bringt bald jeder Königin *leit*, was später zum größeren Verderben führt. Das Nibelungenlied besteht nämlich aus zwei Racheakten für *leit*, die aber ganz verschieden sind. Im Gegensatz zu Prünhilt, deren Vergeltung nur auf der Beleidigung der *êre* beruht, rächt Kriemhilt ihren Mann aus der treuen Liebe. Das ist das neue Motiv des Nibelungendichters. Dem Liebe-Motiv Kriemhüls steht das Macht-Motiv Hagenes feindlich gegenüber. Die Nibelungentragödie ist ein tragischer Kosmos, den das neue Liebe- und das alte Macht-Motiv weben. In diesem Kampf mit Kriemhilt schützt der grimmige Hagene als der erste Vasall die *êre*, d.h. das Ansehen des Burgondenlands. Seine *êre*, die später auch den unbeugsamen Geist des Helden bedeutet, knüpft sich aber gleichfalls an das Dämonische. Er stirbt am Ende in höchstgewahrter Ehre als ein unentwegter Held, ohne sich vor dem verhängnisvollen Untergang zu fürchten. Zum Unterschied von dem grimmigen Hagene tritt Rüdegêr als höfisch-hochsinniger Ehrenmann auf. Er gerät aber wegen dieser Ehrlichkeit in eine innerlich-tragische Situation, wo er schließlich dem Verhängnis des Verfalls folgen muß. Er hat also etwas mit Sifrit und Hagené gemein: den germanischen Geist, dem Untergang nicht auszuweichen, sondern gegen dessen Verhängnis anzustürmen.

In Hartmanns Artusromanen sind die Vorstellungen von *êre* und *leit* ganz anders als die im Nibelungenlied. Das *leit* bei Hartmann, nicht von dem Gegenspieler angetan, sondern der eigenen Nachlässigkeit der Hauptperson entsprungen, bringt später durch herzige Buße und gute Tat die *êre*, d.h. Gottes Gnade. Der Ritter Erec, durch den Sperberwettstreit die *êre* gewonnen, gerät nämlich zwar bald leicht in das *leit*, indem er sich der Liebe zu der Frau Enite hingibt. Er stellt aber durch positive Probe die *êre* wieder her. Der Ritter Iwein auch, durch das Quellenabenteuer die *êre* gewonnen, verliert zuerst durch seine eigene Schuld die *êre* in der ritterlichen Welt, wird aber endlich durch gute Tat und innere Wandlung reif für Gottes Gnade.

So ist der auffallende Unterschied zwischen den beiden Strukturen zu erkennen. Das Thema des Nibelungenlieds, daß *liebe* mit *leit* endet, entfaltet sich in der Doppelstruktur der Tragik.

Die künstlerische Anziehungskraft des Epos besteht in der kontrastlichen Spannung von beiden Teilen, und zwar in der Spannung des Altgermanischen und des Höfisch-Ritterlichen. Der Nibelungendichter hat seine eigene Welt der Nibelungentragik gebildet, indem er die beiden Elemente bald verschmolzen und bald gegenübergestellt hat. In Hartmanns Werken dagegen, die gleichfalls wie im Nibelungenlied zweiteilig sind, ist die Handlung des zweiten Teils zwar Umkehrung des ersten Teils, aber die Umkehr ist kein größerer Untergang, sondern eine harmonische Entwicklung zum Höheren. Das Nibelungenlied beherrscht das altgermanisch-tragische Schicksal, Hartmanns Artusromane der christlich-harmonische Gott. In diesem Punkt besteht der wesentliche Unterschied von den beiden. Der Nibelungendichter schaut nämlich die höfische Welt aus dem altgermanischen Volksgeist geschichtlich und tragisch an, und Hartmann von dem persönlichen Standpunkt aus religiös und moralisch. Der Nibelungendichter muß in diesem Sinne anonym sein. Die Anonymität, die zu der Idee des Dichters gehört, ist eine Form des Heldenepos. Der literaturgeschichtliche Wert des Nibelungenlieds liegt gerade darin, daß es sich zu einer neuen mittelalterlichen Dichtung entwickelt hat und dennoch in der Tiefe den eigenen Volksgeist bewahrt.

序

『ニーベルンゲンの歌』は、五、六世紀のライン・フランケンで生じた伝説をその源泉とし、たいていは歌謡の形でいくつかの段階を経たのち、十三世紀初頭にドーナウ地方の詩人によって叙事詩の形式で創り上げられたものである。その生成史に関しては1921年のアンドレアス・ホイスラーの研究¹⁾が画期的なものであり、彼によって素材史的な研究は揺るぎない礎石を置かれたとすることができる。そこで我々も前稿²⁾においては、北欧に伝承された新旧二つのニーベルンゲン伝説を整理したあと、このA.ホイスラーの発展段階説に従って『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を明らかにした。その結果この叙事詩の構成上の特質として明確になったことは、『ニーベルンゲンの歌』はもはやブリュンヒルト伝説とブルグント伝説³⁾との単なる集積ではなく、クリエムヒルトを中心人物として一つにまとめられ、全体が有機的な関連を有しつつ、しかも前編と後編とが対をなして整然とした構成を示している作品であるということである。ニーベルンゲンの詩人は、クリエムヒルトを自らの作品の中心に置き、クリエムヒルトを独自の方法で形象化することによって、二つの素材を一つにするとともに、古代ゲルマン歌謡の遺産を新しい中世文学としての叙事詩的世界へと発展的に統一することに成功したのである。『ニーベルンゲンの歌』は素材からすれば確かに古代ゲルマンの「英雄文学」の枠内にあるが、しかし、成立年代と詩人の内的態度からすれば、ホーエンシュタウフェン朝時代(1138-1254)の「宮廷文学」に

-
- 1) Andreas HEUSLER: Nibelungensage und Nibelungenlied. Dortmund 1921. (Nachdruck, Darmstadt 1973.)
 - 2) 拙稿：ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』 徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)第1巻1990年
 - 3) 固有名詞に関して一般的に述べる場合には現代ドイツ語の発音に従って表記するが、以下において中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』について述べる場合には原則として中高ドイツ語の発音に従って表記する。

属するのである。この作品において描かれた社会は、当時の宮廷叙事詩——その素材は主にフランスの既成の作品に由来する——と同じように、雅やかな宮廷社会であり、そこに見出される「饗宴」(hochgezeit)、「競技」(buhurt)、「衣裳」(gewant)、「礼儀作法」(zuht)、「婦人奉仕」(minne)等がその雅やかな社会を一層宮廷的なものへと高めている。この点において『ニーベルンゲンの歌』は宮廷叙事詩と共有するものがあるが、しかし、本質的に異なるものであることもまた事実である。宮廷的特徴として上に挙げた「饗宴」はこの作品ではのちには「戦いの場」に転化し、饗宴の際華やかに繰り広げられた「競技」はのちには「惨忍な決闘」となる。華やかな「衣裳」もいつの間にか「重々しい武装」となり、宮廷的な「礼儀作法」は古代ゲルマン勇士としての「反抗精神」へと変化する。「婦人奉仕」の歓び(lieb)も結局は恐ろしい災い(leit)に終わってしまうのである。『ニーベルンゲンの歌』におけるêre(名誉)はこのようにことごとくleit(災い)に終わってしまうのであり、この作品には宮廷的特徴と同時に、素材に由来する古代ゲルマン的要素もなお多分に残されているのである。では一体、この二つの要素の混合はどのように解されるべきであろうか。この二つの要素は『ニーベルンゲンの歌』の全体の構造にとってどのような意味を持っているのであろうか。本稿では、中世文学においてとりわけ重要な役割を演じているêreとleitという概念を手がかりとして、『ニーベルンゲンの歌』をハルトマンの宮廷叙事詩、なかでも典型的なアルトゥース・ロマーンである『エーレク』及び『イーヴェイン』と比較し、両者の内的構造の相違を明らかにすることによって、中世文学における『ニーベルンゲンの歌』の特異性を明確に打ち出すことにしたい。

1. 『ニーベルンゲンの歌』におけるêreとleitの展開

1. ジーフリトのliebとleit——ミンネと宿命——

『ニーベルンゲンの歌』⁴⁾において今やクリエムヒルトが中心人物であるということは冒頭の「鷹の夢」からも明らかである。この「鷹の夢」は、素材においてすでに語られていたものと推定される⁵⁾が、しかし、それはまだブリュンヒルト伝説の枠内にあり、復讐については触れられていなかった。ニーベルンゲンの詩人はその「鷹の夢」を踏襲してクリエムヒルトを中心人物としたばかりか、さらにその中に愛しい夫ジーフリトのための復讐を盛り込むことによって二つの素材を一つに結びつけることに成功したのである。

全体が愛しい夫のための復讐となったため、その夫ジーフリトは生い立ち等の点で改作を施されねばならない。伝承によれば、ジーフリトは本来古代ゲルマンの英雄であり、実際にこの作品の中でも、「彼はニーベルンゲンの財宝を獲得し、竜をも退治して不死身の英雄となった」(86-

4) テキストには Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage (F.A. Brockhaus) Wiesbaden 1972. を使用し、邦訳は相良守峯訳(岩波文庫)を大体においてそのまま用いるが、論述の都合から表現を若干変えるところもある。

5) Vgl. A. HEUSLER: a.a.O., S. 122.

101) ことがあとでハゲネによって語られるが、しかし、この作品ではとりあえずまずはニーデルラントの騎士的王子として登場し、やがて成長してブルゴント国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞く(44,2)と、そのミンネを求めて旅に出かけてゆくのである。しかもその際彼が求めたのは「位高き乙女のア」(hōhe minne, 47,1;131,4)であったと表現されているのも決して意味のないことではない。ジーフリトはクリエムヒルトの高きミンネを求めて冒険の旅に出かけてゆく典型的な中世騎士であり、それ以後の二人の物語はミンネザング風に刻み込まれた感情と思考において展開し、この高きミンネを得るためには幾多の「幸福」(liebe, 138,4)とともに、また「苦難」(leide, 138,4)をも味わわなければならないのである。

そのまず第一の「苦難」とは、ザクセン戦争でグンテル王の援助をすることであり、この戦いにジーフリトが自ら進んで出かけて行ったのもその愛らしい乙女のアを得るためである⁶⁾。その戦いで手柄を立てることによって、ジーフリトはその祝宴でクリエムヒルトに会える機会を得るのであるが、初めて姿を現わす彼女を目の前にしてジーフリトは「哀歎交々いたる思い」(lieb und leit, 284,4)である。クリエムヒルトの美しさに直面してミンネザング風の「妄想」(wān, 285,2)が彼の心の中に起こるのである。

Er dāht' in sīnem muote:	《wie kunde daz ergān,
daz ich dich minnen solde?	daz ist ein tumber wān.
sol aber ich dich vremeden,	sō wære ich sanfter tōt.》
er wart von den gedanken	vil dicke bleich unde rōt. (285)

彼は心に思った、「どういふ間違いで、
 姫を恋するようになったのか。それはとんでもない思いあがりだ。
 さりとて思いあきらめるくらいなら死んだほうがよほどました。」
 思い乱れるあまりに、彼はあかくなったり蒼くなったりした。

本来古代ゲルマン的な勇士であるジーフリトも、ここではクリエムヒルトの相対物として、ミンネの苦しみをも経験する宮廷的騎士として描かれている。やっと会うことができ、挨拶を受けたにしても、ジーフリトはまだなおクリエムヒルトを妻にすることはできない。この愛の実現の延期は、クリエムヒルトへの愛の深さを表している。愛をかち取るためには、第二の「苦難」としてジーフリトは、グンテル王がプリュンヒルトの愛を求めてイースラントへ旅立つ際にも援助をしなければならない。本来古い素材に属するこのイースラントへの随行は、ここでは先のザクセン戦争と同様、クリエムヒルトに対するジーフリトのミンネ奉仕に変えられてしまっている⁷⁾の

6) 258, 260, 304詩節等を参照のこと。

7) 333, 388, 535-6詩節等を参照のこと。

であり、この冒険をも見事に克服してのちようやく、ジーフリトはクリエムヒルトを妻にすることができるのである。

このようにジーフリトのミネ体験における leit は「恋の悩み」とも言うべきもので、「欲び」(lieb) に対する概念であり、ジーフリトとクリエムヒルトとの愛の物語は宮廷的ミネ奉仕としての求婚の様式を示していると言えよう。このようなジーフリトの求婚と著しいコントラストをなしているのがグンテル王の求婚である。ジーフリトがブルゴントの国に美しい乙女がいるという噂を伝え聞いて (44,2) ウォルムスに出かけて行ったように、グンテル王も海のかなたに一人の美しい女王が君臨しているのを伝え聞いて (326-8) イースラントへ出かけて行くが、乙女の愛を自分一人の力で手に入れる (59,1) ジーフリトに対して、グンテル王の場合は最初から他人の力を借りて (332) の求婚である。美しい乙女を面前にしたときのジーフリトの悩みがミネザング風の「妄想」(wān, 285,2) であったのに対して、女豪傑プリュンヒルトを目の前にしたときのグンテル王のそれは「恐怖」(sorgen, 441,4) である。

Er dāhte in sīnem muote:	《waz sol diz wesen?
der tiuvel ūz der helle	wie kund'er dā vor genesen?
wær' ich ze Burgonden	mit dem lebene mīn,
si müeste hie vil lange	vri vor mīner minne sīn.》(442)

彼は心に思った、「これはなんとしたことか。
地獄の悪魔といえども、これには命を全うするわけにいくまい。
おれが生きてブルゴントの国へかえれたら、
もはや二度とこんな女に思いをかけることはなからう。」

これを上で引用した285詩節のジーフリトのミネザング風の「妄想」(wān) と比較するとき、求婚する騎士が対照的に描かれていることが明らかである。両者のコントラストは、さらにその後両者がそれぞれの花嫁と結ばれる場面でも明らかである。クリエムヒルトは兄グンテルから結婚の話が聞かされたとき、乙女ごころの慎ましやかさと当然の服従 (613-5) でもって、兄の望みと同時に自分の密かに抱いていた望みに従うのであり、ジーフリトが品位ある愛をもって花嫁のそばにかしづいたときも、「彼女は彼にとっていのちとなった。彼女の一身は、千人の他の女にも換えがたいものであったろう」(629,3-4) と称えられている。これに対してグンテル王がジーフリトの援助で花嫁にすることができたプリュンヒルトのそばに横たわろうとすると、彼女はこれを拒み、夫に対して手ひどい苦痛 (leide, 636,4) を与えたのである。国王として、また騎士としてこの上ない「恥辱」(leide) を受けたグンテルは、再度ジーフリトの秘策の手を借りて初めてプリュンヒルトを妻とすることができるのであり、ジーフリトの場合と著しいコントラストをなし

ていることは一目瞭然である。このようにグンテル王とプリュンヒルトとの肉欲的な愛と著しいコントラストをなして、ジーフリトとクリエムヒルトとの理想的な結婚は、ミンネザング風に展開されているのであって、ともかくジーフリトのミンネを求めての数々の冒険は、こうして名誉あるものにまで高められているのである。

ところが、このジーフリトの誉れ高いミンネは、結ばれるとともに徐々に崩れてゆく運命にある。否、この愛の破滅は、最初から宿命であったのであり、叙事詩の冒頭でクリエムヒルトが鷹の夢を見た(13,1-3)ときからすでに定められていたことである。鷹が二羽の鷲の爪に引き裂かれた恐ろしい夢を見た姫クリエムヒルトが、母后ウオテに

《ez ist an manegen wiben vil dicke worden scîn,
wie liebe mit leide ze jungest lönen kan.
ich sol si mîden beide, sone kan mir nimmer missegân.》(17,2-4)

「恋の喜び (liebe) が結局悲しみ (leide) をもたらすということは、もう、いろいろの女の例で、はっきりしています。私は恋も悩みも両方捨てますから、悪いことも起りますまい。」

と語る言葉の中には、もうすでにジーフリトのミンネが破滅に終わることを暗示している。ここにおける leit は、上述の「恋の悩み」以上のものを指し示しており、具体的に示せば、ジーフリトの死、すなわち、クリエムヒルトの本来の leit をほのめかしていると言ってもよいであろう。英雄ジーフリトは、クリエムヒルトのミンネを求める限り、最初から死ぬ運命にあったと言わなければならないのである。

それは一体なぜであろうか。ジーフリトは不死身の英雄でありながら、なぜ死すべき運命にあるのであろうか。一言では言い尽くせぬ問題を含んではいるが、まず第一に指摘されるべきは、財宝の霊の力であろう。ジーフリトはニーベルンゲン族を打ち倒し、侏儒アルプリーヒからは隠れ蓑をも奪い取って、ニーベルンゲン財宝のことごとくを所有してしまった(97,4)がゆえに、最後には死ななければならないのである。ニーベルンゲンの詩人は宝庫の番人アルプリーヒにそのことを明らかに語らせている。

《Nu ist ez Sifride leider übel komen,
daz uns die tarnkappen het der helt benomen
unt daz im muose dienen allez ditze lant.》(1120,1-3)

「ところが、あの勇士が我々から隠れ蓑を奪いとり、この国全土があの方の支配するところとなったということが、

結局あの方の不幸を招くこととなったのだ。」

隠れ蓑が素材において用いられた形跡はなく、『ニーベルンゲンの歌』の作者が初めて導入したものであるにしても、ジーフリトの死にはとにかくニーベルンゲン財宝の霊の力が働いていたことが明らかである。「ニーベルンゲン」(Nibelungen)とは暗黒を意味し、ニーベルンゲンの宝を持つ者は滅びなければならない⁸⁾。ジーフリトはニーベルンゲンの宝の所有者となり、ニーベルンゲン国の主人となったがために、滅びなければならない運命にあったのである。ここには古代ゲルマンのニーベルンゲン伝説に由来する不思議な力が作用しており、前編の主人公ともいうべきジーフリトは最初から死すべき運命にある古代ゲルマンの英雄である。その古い素材に由来する財宝の呪いによる死が、この作品の中ではミンネを求める勇士の死と重なり、ジーフリトはミンネを求める限り破滅する運命にあるのである。従って、ここには古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素とが見事に溶け合い、重なり合っていると言えよう。中世的なミンネもここでは古代ゲルマン的運命の支配下にあるのであり、「高きミンネ」のêreも完成すると同時に、古代ゲルマン的な運命によって脆くも崩れ落ちてしまうのである。ここにêreとしてのミンネを求めるジーフリトの悲劇的世界があると言えよう。

2. プリュンヒルトの leit — 王妃としての恥辱 —

このように古代ゲルマンの英雄ジーフリトはブルゴント国のあでやかなクリエムヒルトに求婚し、逆にグンテル王は古代ゲルマン的な超人的な女性プリュンヒルトに求婚するのであり、二組の求婚が全くのコントラストをなしていることは一目瞭然である。原始時代の英雄であるジーフリトは十三世紀初頭の宮廷的世界へ歩み入り、宮廷的国王であるグンテルは原始時代の世界に歩み入るのである⁹⁾。そしてジーフリトは花嫁を戦い取るのではなく、ウォルムスでの作法に則ってミンネ奉仕によってクリエムヒルトを妻にするのに対して、グンテルは逆に騎士としての求婚ではなく、冒険によってプリュンヒルトを戦い取ろうとするのである。従って、二人は彼らがそうであるものによって彼らの目標を達成しようとするのではなく、それとは反対のもの、すなわち、仮の姿によって目標を達成しようとしている。そのためには嘘と欺きが必要であり、ジーフリトは今やグンテル王の臣下として援助するが、これが結局はプリュンヒルトの leit となる。すなわち、ブルゴントの国で二組の結婚式が執り行われたとき、プリュンヒルトは、クリエムヒルトがジーフリトと並んで坐っているのを見ると、突然泣き始めたが、こんな「口惜しい」(leit, 618,2) ことはなかったのである。プリュンヒルトの白い頬の上を熱い涙が流れ落ちた(618,4) のを見たグンテル王がそのわけを尋ねると、プリュンヒルトは答えてこう言う。

8) 吉村貞司：ニーベルンゲン伝説 鎌倉書房1943年38-9頁参照。

9) Vgl. Walter Johannes SCHRÖDER : Das Nibelungenlied. Versuch einer Deutung. Beiträge 76, 1954. S.75.

《Ich mac wol balde weinen》, sprach diu schoene meit.
 《umbe dine swester ist mir von herzen leit.
 die sihe ich sitzen nâhen dem eigenholden dîn.
 daz muoz ich immer weinen, sol si alsô verderbet sîn.》 (620)

「私は泣かないわけには参りません、」と美しい姫が言った。
 「お妹君のことが、私は心から悲しい (leit) のでございます。
 あの方は臣下の身分の者と並んで坐っているではありませんか。
 あんなに身を貶^{おと}すなんて、泣かぬわけに参りません。」

ここにおけるプリュンヒルトの leit、すなわち、熱い涙を流す要因とは一体何であるのかに関しては、これまでさまざまに論ぜられてきた¹⁰⁾が、ここで伝説・歌謡の潜在的な作用を認めて、プリュンヒルトの涙の背後にあるものはジーフリトへの失恋、クリエムヒルトへの嫉妬であると説くにしても、また反対に伝説・歌謡は全く無視して、プリュンヒルトはグンテル王の妃として「王家全体の恥辱」¹¹⁾を感じていたのだと解するにしても、いずれにせよここでは表面的には少なくとも女性としての、あるいは王妃としての「恥辱」(Beleidigung, Entehrung)が読み取られてよいのではあるまいか。また自分に対するグンテル王の求婚に何か欺瞞があったのではないかという疑惑から来る「恥辱」も働いていたと考えても差し支えないであろう。であるからプリュンヒルトは「どうしてクリエムヒルト様がジーフリトの妻になったかをおっしゃって下さらない限りは、私はお側に寝なくともよいように、逃げるところがあれば逃げたいくらいです」(622, 2-4)と執拗に絡んで来て、さらに新婚の臥所でも、グンテル王が彼女をかき抱こうとすると、彼女は自分の帯で王の手足を縛りあげ、彼を一本の釘にかけて壁に吊してしまうのである。このようにプリュンヒルトは、夫を愛するクリエムヒルトとは対照的に、ともかく高慢な王妃として描かれているのである。

求婚の際に対照的に描かれていたクリエムヒルトとプリュンヒルトは、結婚して王妃の地位に就いたのちにも対比的に描かれている。二組の夫婦がそれぞれの国で暮らして十年の年月を経た頃、高慢な王妃プリュンヒルトは始終、家臣であるジーフリトが久しいこと宮廷に伺候しないことを腹立たしく思っていた(724)のである。ジーフリトとクリエムヒルトとが彼女に対して疎遠になり過ぎて、ジーフリトの国から一向に出仕もしないことは、彼女にとって「面白からぬ」(leit, 725, 2)ことであったのであり、この leit も、王妃として「侮辱」されていたものと解され

10) 桜井和希：プリュンヒルト＝ジーフリト伝説——歌謡と叙事詩——手塚富雄教授還暦記念論文集「ドイツ文学における伝統と革新」筑摩書房1965年を参照のこと。

11) Helmut de Boor (Hrsg.): a.a.O. 620 詩節の脚註参照。

て差し支えないであろう¹²⁾。そこでプリュンヒルトは夫に頼んでジーフリトとクリエムヒルトを招待することになり、ここに両王妃の口論が始まるが、この両王妃口論について言えることは、「辱かしめ」を受けるのはもっぱらプリュンヒルトの方ばかりということである。すなわち、グンテル王の結婚の夜の秘密を暴露される(840,2-4)ことでもってクリエムヒルトから歯止めをかけられ「口惜しく」(leide, 846,4)になっていたプリュンヒルトは、さらに証拠として金の指輪を見せつけられ(847,2-3)、プリュンヒルトにとってこんな「口惜しい日」(leideren tac, 847,4)はなかったほどである。「その指輪は盗まれていたものです」(848,1-2)と反論しても、それが結局決定的な「恥辱」のきっかけとなる。

Dô sprach aber Kriemhilt: 《ine wils niht wesen diep.
du möhtes wol gedaget hân, und wære dir êre liep.
ich erziugez mit dem gürtel, den ich hie umbe hân,
daz ich niht enliuge: jâ wart mîn Sifrit dîn man.》(849)

クリエムヒルトが再び言った。「私は盗人ではない筈です。
あなたが名誉(êre)を重んじられるなら、黙っておられればよいのに。
私が嘘つきでない証拠には、私が締めている
この帯をごらん下さい。夫は確かにあなたを側女そばめとしたのです。」

ここにおいて王妃としてのプリュンヒルトの「名誉」(êre)は、ほとんど埋め合わせられないほどに傷つけられている(853,1-2)のである。彼女自身グンテル王に向かって「ひどい恥辱」(der vil grôzen schande, 854,4)を訴えている。

《Si treit hie mînen gürtel, den ich hân verlorn,
und mîn golt daz rôte. daz ich ie wart geborn,
daz riuwet mich vil sêre, dune beredest, künic, mich
der vil grôzen schande; daz diene ich immer umbe dich.》(854)

「あの方は私が失くした帯を締め、私の純金の指輪をはめているのです。
もしあなたが私のこのひどい恥辱(schande)を弁明して下さらないなら、
私は生まれたことを口惜しく存じます。
弁明して下さるなら、いつまでも恩に着ますが。」

12) Vgl. Friedrich MAURER: Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. 1951. S.31.

846詩節と847詩節における leit (口惜しさ) は、ここにおいて schande (恥辱、不名誉) で代用されていることは注目すべきである。両王妃の口論におけるプリュンヒルトの leit は、schande と同一的に用いられ、明らかに êre の反対概念として用いられているのである。従って、この口論においてプリュンヒルトに付け加えられた leit は、本質的には王妃あるいは女性としての「名誉」(êre) の「恥辱」(schande) という意味を帯びていると言えよう。プリュンヒルトの「恥辱」をもってブルゴント王家は「侮辱」されたのである¹³⁾。「名誉」の「恥辱」というものを、ブルゴント側のハゲネは血でもって償わなければならない (erarnen, 864, 3; leit, 873, 3) と考え、またオルトウィーンも「王様のお許しがあれば、私がジーフリトを存分にやっつけます」(leit, 869, 3) と復讐を誓い、こうしてプリュンヒルトの leit (恥辱) がジーフリトの leit (死) を呼び起こしてゆくのである。

3. クリエムヒルトの leit — 愛しい夫の死とその復讐 —

このようにプリュンヒルトが地位に固執した高慢な王妃として描かれているのに対して、クリエムヒルトは逆に王妃というよりは相変わらず夫を愛する宮廷的貴婦人として描かれている。両王妃が相並んで座につき、誉れ高い二人の武士のことを語り合ったときも、クリエムヒルトはただ何の意図もなく、愛する夫の誉れを称えているに過ぎない。夫ジーフリトを愛する女性としてクリエムヒルトは、単に無意識的に愛しい夫を称える言葉を述べたに過ぎないのに、その無邪気な言葉が高慢なプリュンヒルトの王妃としての威厳を傷つけ、そのことが王妃たちの激しい口論へと発展してゆく。従って、この両王妃口論で言えることは、クリエムヒルトではなく、プリュンヒルトがその口論を煽っており、クリエムヒルトを意識的に怒りへ刺激しているということである。クリエムヒルトは長い間自制したのち、ついに怒りを覚えて、プリュンヒルトを側女 (kebse, 839, 4) と罵るが、このとき彼女にそのような言葉を吐かせたのも、結局はジーフリトへの彼女の情熱的な愛である¹⁴⁾。ジーフリトを愛する妻として彼女は夫をグンテル王の家来 (man, 821, 2) に見られることに耐えられないのである。このようにジーフリトへの熱烈な愛が、両王妃の口論を激化させ、悲劇の原因ともなったのである。

ハゲネの策略によって一族が再度ザクセン戦争に出かけることになり、ハゲネが暇乞いのためクリエムヒルトの座所に伺候したときも、クリエムヒルトはただ夫ジーフリトを愛するがゆえに、夫を護ってもらいたく、夫の急所をハゲネに打ち明けてしまう。しかし、戦闘が中止となり、狩りに出かけることになると、打ち明け話をしたことによってかえってクリエムヒルトの心配は増してくる。彼女はその不安を夫にほのめかして狩りに出かせないよう警告するが、ジーフリトは一族を信頼してそれを軽くうけながす。彼女は悪夢を引き合いに出して再度警告するが、夫の英

13) Vgl. Fr. MAURER : a.a.O., S.20.

14) Vgl. Marianne Wahl ARMSTRONG : Rolle und Charakter. Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. Göppingen 1979. S.274.

雄としての誇りを大切にすゝる気持ちから、ハゲネに秘密をもらしたことは打ち明けることができない。彼女の二度にわたる警告の中には、彼女の愛と不安が複雑に入り混ざっているのである。

こうしてまさに夫を大切に想う心からクリエムヒルトは、逆に夫を失う結果となるが、彼女の愛がいかに大きいものであったかは、ジーフリト埋葬の際にも容易に読み取られる。柩はすでに閉じられてしまっていたけれども、埋葬の前にもう一度夫を見たい(1068)という彼女の希望は、彼女の情熱の激しさを示しており¹⁵⁾、ここではっきりと言えるのは、クリエムヒルトはジーフリトの死を悲しんでいるのであって、決して彼女が関与したジーフリトの権力のことを悲しんでいるのではないということである。ジーフリト殺害後、クリエムヒルトは強調されかつ繰り返されて「悲しめる王妃」(diu jâmerhafte, 1014,1) ないし「悲しめる女性」(daz jâmerhafte wîp, 1041,4) あるいは「悲しみ多き妃」(diu jâmers rîche, 1031,1; 1218,1) と表現され、また彼女自身「私はみじめな女」(ich jâmerhaftez wîp, 1259,3) と呼んでおり、この表現が『ニーベルンゲンの歌』ではもっぱら彼女のために用いられているのも決して偶然ではない¹⁶⁾。そこに含まれているのはまさに「心痛」、ジーフリトの死による「悲しみ」であり、ジーフリト暗殺によるクリエムヒルトの leit は、詩人によって交互に leit と jâmer で表現されている全く取り乱した「悲しみ」であると言ってよいであろう。

このようなクリエムヒルトをさらに悲しませるのがハゲネによる不実な財宝強奪であり、この財宝強奪は、クリエムヒルトにとっては「新たな悲しみ」(iteniuwen leiden, 1141,1) を意味しているが、クリエムヒルトは死んだジーフリトを悲しんでいるのであって、財宝に基づく権力の喪失を悲しんでいるのではないことは次の詩節からも明らかである。

Und wære sîn tûsent stunde noch also vil gewesen,
und solt' der herre Sifrit gesunder sîn gewesen,
bî im wære Kriemhilt hendebloz bestân.
getriuwer wîbes künne ein helt nie mër gewan. (1126)

しかし、たとえこの宝がその千倍あったとしても、
もし勇士ジーフリトを元の健やかな身に返すことができたなら、
クリエムヒルトは手を空しくしても彼の許に留まったであろう。
勇士たる者、こんな貞節な妻は持った例がなかった。

愛する女性にとって富と権力は夫と比較してそれほどのものをも意味してはいない。クリエムヒルトにとって問題なのは、忘れられない夫なのであって、失われた名誉と権力ではないのである。

15) Vgl. ebd. S.281.

16) Vgl. ebd. S.61.

財宝強奪がクリエムヒルトにとって悲しいことであったのは、すなわち、それがジーフリトの^{きねぎぬ}後朝の贈物であり、ジーフリトの象徴であったからである。従って、クリエムヒルトの「新たな悲しみ」とは、ジーフリトの象徴である財宝を強奪されることによって「夫殺害による leit」がさらに深くなったという意味に解すべきであろう。クリエムヒルトの leit はもっぱら夫の死に基づくものであり、プリュンヒルトの leit とは本質的に異なるものであると言えるのである。

クリエムヒルトの leit がもっぱらジーフリトを失った「悲しみ」であり、彼女が権力というものに無関心であったことは、後編においてフン族のエツェル王から求婚された際にも明らかである。エツェル王の使者リュエデゲールが彼女に向かって、結婚の暁には十二の豪華な王冠や無慮三十の国々(1235)及び無比の権力(1237)を入手できると保証しても、彼女はこう答えるのである。

Dô sprach diu küneginne: 《wie möhte mînen lîp
immer des gelusten, deich wurde heldes wîp!
mir hât der tût an einem sô rehte leit getân,
des ich unz an mîn ende muoz unvoeliche stân.》(1238)

妃がこたえた、「英傑の妻になったとて、
どうして私にとって嬉しいことがありましょう。
一人の男の死によって、それはひどい悩み (leit) をあたえられましたので、
私は命が終るまで、楽しい時とてありますまい。」

その「悲しみ」(leit) は強大な国王エツェルとの結婚によって償われましょうと言って、王弟ギーゼルヘルや母后ウオテなどがしきりに説得するが、彼女の心のうちは依然と変わらぬままである。翌日再度対面したリュエデゲールの誠実な誓いによってようやく、彼女の決心は揺らいでしまうが、しかし、この決心の背景にはジーフリトへの誠実な愛があったことは確かである。彼女はこう考えたからである。

Do gedâhte diu getriuwe: 《sît ich vriunde hân
alsô vil gewonnen, sô sol ich reden lân
die liute, swaz si wellen, ich jâmerhaftez wîp.
waz ob noch wirt errochen des mînen lieben mannes lîp?》(1259)

貞節な妃は考えた、「私はみじめな女だけれど、
こんなにたくさんの味方を手に入れた以上、

世の中の人にはなんとでも言いたいように言わせておこう。

愛しい夫の復讐ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

エッツェル王との再婚の決意も結局はジーフリトへの誠実からであり、それは下線部のように「貞節な妃」(diu getriuwe)と呼ばれていることから明らかである。彼女はただジーフリトへの誠実な愛のためにエッツェル王と結婚するのであり、この結婚はクリエムヒルトにとって目的達成のための手段に過ぎない。再婚後、大きな誉れの中に暮らす日々ではあっても、彼女は故郷で我が身に加えられた悩み (leide, 1391, 4) を忘れはしなかったのであり、ついに招待という形で実行に移る。この後編におけるクリエムヒルトの招待が前編のプリュンヒルトの招待と対をなしていることは明らかであるが、「名誉」の回復から復讐を実行したプリュンヒルトとは対照的に、クリエムヒルトは「悲しみ」から復讐を実行するのである。

ブルゴント族がフン族の国に到着するや否や、クリエムヒルトは最初からハゲネと激しく対立し、両者の対立には最初から最後まで財宝が関与しているが、クリエムヒルトが財宝に執着するのも、上で述べたように、それが愛しい夫ジーフリトの象徴であり、「愛」の象徴だからである。一方、ハゲネにとって財宝は「権力」の象徴であり、ここでは財宝をめぐる「愛」のモチーフと「権力」のモチーフが交錯していると言えよう。財宝は今や両者にとって「勝利の呪物」¹⁷⁾なのであり、ハゲネとしても財宝を引き渡すことはできず、依然として激しく反抗してこう言う。

Dô sprach der grimme Hagene: 《diu rede ist gar verlorn,
vil edeliu küneginne. jâ hân ich des gesworn,
daz ich den hort iht zeige, die wîle daz si leben
deheiner mîner herren, sô sol ich in niemene geben.》(2368)

猛々しいハゲネがいった、「そのようなお言葉は何の役にも立ち申さぬ、
貴いお妃様。わしは、わが主君がたがお一人でもご存生の間は、
宝のありかを言わぬと誓ったのでござる。
それゆえわしは何びとにも宝は差しあげられぬのだ。」

ハゲネはこのような言葉巧みな策略でもって、クリエムヒルトに実兄グンテルの首を打ち落とさせるが、これはすぐあとのハゲネの言葉からも明らかのように、「ハゲネの考えたとおりの成行き」(2370, 4)であったのであり、それではハゲネは償いをしないことになるかと悟ったクリエムヒルトは、次のような言葉を口にしつつ、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、ハゲネの頭を打ち

17) Vgl. ebd. S.164.

落としてしまうのである。

《sō wil ich doch behalten daz Sifrides swert.
daz truoc mîn holder vriedel, dô ich in jungest sach,
an dem mir herzeleide von iuwern schulden geschach.》(2372,2-4)

「それならばせめてジーフリト殿の剣を貰っておきましょう。
これは私の愛しい人の見納めの日に、あの人^いが携えていたもの。
私の心痛はおん身のために生じたものです。」

この言葉がクリエムヒルトの最後の言葉となったのも決して意味のないことではない。クリエムヒルトの復讐は、愛しい夫ジーフリトの死による「心の悲しみ」(herzeleide) からなされたのであり、愛しい夫ジーフリトへの変わらぬ愛のあかしである。この愛のために復讐するという新しいモチーフこそはニーベルンゲンの詩人の最も固有な業績の一つであると言ってよいであろう。仇敵ハゲネが素材に由来する「権力」という古いモチーフを保持しているならば、クリエムヒルトはこの作品に「愛」という新しいモチーフを持ち込む役割を果たしているのであり、ニーベルンゲン悲劇は、畢竟、クリエムヒルトの「愛」とハゲネの「権力」という二つのモチーフが交錯する世界であり、この二つのモチーフが対立しながら、一つの悲劇的世界を形成しているところに中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』の特質があるのである。

4. ハゲネの êre — 不屈の英雄精神 —

このようにクリエムヒルトの「誠実な愛」からの復讐が作品の中心に置かれることによって、クリエムヒルトの敵対者が必要となったが、それがトロネゲのハゲネであり、この二人の敵対関係こそが作品全体に統一性を与えている¹⁸⁾ と言えるのである。クリエムヒルトとハゲネとの敵対関係は、しかし、前編においては根本的にはジーフリトとハゲネとの宿命的な対立である。ハゲネが物語の最初からすでにジーフリトの敵対者として位置づけられていたということは、ジーフリトがニーデルラントの国を出るとき彼の父ジゲムントが次のように語った言葉からも明らかである。

《Ob ez ander niemen wære wan Hagene der degen,
der kan mit übermüete der höhverte pflegen,
daz ich des sêre fürhte, ez müg' uns werden leit,

18) Vgl. ebd. S.147.

ob wir werden wellen die vil hêrlîchen meit.》(54)

「例えば、あのハゲネという豪傑のことだけ考えてみても、
あれは思い上がって、無礼なこともしかねぬ男だ。
もし我々が、あの申し分のない娘を所望でもしたら、
我々の身に災いをかもす恐れがないとは言えぬ男だ。」

ブルゴント国王の重臣として常に名誉 (êre)、すなわち、自らの国王の声望 (Ansehen) に目を向けるハゲネは、このように筋の悲劇的展開には必ず関与してくるという悪魔のような存在であり、ジーフリトとはほとんどの点で正反対の人物として語られている。従って、ジーフリトの存在はハゲネにとって好ましくない存在であり、出会った最初の瞬間からすでに敵である。ジーフリトが戦闘や求婚の旅でことごとく成功を収めるたびにその存在はハゲネにはますます嫌な存在となり、それだけに一層彼は主君たちの êre (名誉) である勢力と地位のことを心配しなければならぬ。クリエムヒルトとプリュンヒルトの口論で殺害の口実を得たハゲネは、ジーフリトが亡き者となっただけに一層彼の強化になるかを力説する (870)。プリュンヒルトの恥辱の復讐 (873, 3; vgl. 1790, 3-4) がただ口実に過ぎなかったことは、ジーフリト暗殺後のハゲネの次のような言葉からも明らかである。

Dô sprach der grimme Hagene: 《jane weiz ich, waz ir kleit.
ez hât nu allez ende unser sorge unt unser leit.
wir vinden ir vil wênic, die getürren uns bestân.
wol mich, deich sîner hêrschaft hân ze râte getân.》(993)

尊^{どうもつ}猛なるハゲネがいった、「なぜお嘆きになるのか分かりません。
我々の心配も悩みも、これですっかり片づきました。
我々に楯つくような人間はもういなくなりました。
この男の権勢^{くせ}を挫^くいてしまってよかったと思っているのです。」

ハゲネの本来の望みは、ジーフリトを亡き者とすることによって、自らの国王の êre (権勢) を護ることだったのである。しかし、今度はクリエムヒルトの復讐を警戒したハゲネは、彼女の財宝を奪い取らねばならない。権力であり、本来の êre を意味する財宝を強奪することによって、ハゲネは彼女の勢力を弱めると同時にグンテル王の勢力増加を計ろうとする (vgl. 1107)。そのためにはクリエムヒルトとブルゴント国間の和解が必要であり、ハゲネは和解を進言する。この進言によって和解が成立したあと、クリエムヒルトが財宝をニーベルンゲンの国からブルゴントの国

へ移すと、ハゲネは——国王兄弟の反対にもかかわらず——その財宝を奪い取ったばかりか、ゲールノートの提案（1134）を巧みに利用して、最後には財宝をライン河に沈めてしまうのである。

このようにハゲネはグンテル王の臣下であるが、国王らの反対にもかかわらず全てがハゲネの望み通りに進んでおり、ハゲネこそ実際の指導者であると言える。しかし、そのハゲネが初めて自分の提案を貫き通すことのできないときが来る。エッツェル王求婚のときとフン族の国への招待を受けたときの二つの場面がそれである。いずれの場合にもハゲネ一人のみが反対するが、初めてハゲネの進言が拒否されるのである。こうしてハゲネの忠告は二度にわたってその効力を失っていたが、しかし、ゲールノートとギーゼルヘルとの非難めいた言葉（1462-3; vgl. 1512）に名誉を傷つけられたハゲネは、怒りに燃えてそのフン族の国への招待の旅に同行することを決意する（1464, 2-4）。このときからハゲネの *êre* は、国王の声望を護るというよりは不屈の精神を貫き通す武士の名誉である。不吉な夢（1510; vgl. 1509）ももはや彼の邪魔をしない。名誉（vgl. 1510; 1512）のためなら、どんな恐怖にも左右されはしない（1513, 1）。この決意でもってハゲネは再び内的な自由を取り戻したのである。

こうして困難に立ち向かって進んでゆくハゲネの勇壮な姿は、一見、ジーフリトの姿、すなわち、クリエムヒルトの不吉な夢にもかかわらず策略の戦闘へと勇敢に出かけてゆく姿によく似ている。しかし、ハゲネの姿がジーフリトの場合と異なっている点は、ハゲネは自らの破滅を自覚しているということである。なるほどジーフリトは結局は死ぬことになるが、しかし、旅立ちの際その死を認識していたわけではない。それに対してハゲネは破滅をしかと認識していたことは疑いがない。彼が武装をして出かけるようにと忠告した（1471, 3-4）のも、まさにその死の認識のためである。その滅亡の認識が最も明白になるのは、旅路の途中でドーナウ河を渡るときである。王室の司祭以外は誰も生きて帰れないという占い（1542）を妖精の一人から聞いたハゲネは、ドーナウ河を渡る際、司祭を船から投げ落とす。しかし、司祭は泳ぎもできなかったのに神に救われて元の岸にたどり着くことができたのを見て、ハゲネはその水の乙女の占ったことが避けがたい運命であることを悟ったのである。

er dächte: 《diese degene müezen verliesen den lip.》 (1580,4)

彼は思った。「これらの勇士は滅びなければならない。」

しかし、この瞬間ハゲネの内から英雄的なものが生じてきたのである。英雄的なものは「ある」(sein) のではなく、「成る」(werden) ものである。ハゲネが真に英雄であるのも、滅亡を自覚しそれに向かって突き進んでゆくまさにこのときからである。ドーナウ河を渡ってしまったあとでハゲネは船を打ち壊して河に流してしまうが、これも滅亡を恐れない勇敢なハゲネの英雄的精神のなせる行為である。帰るときにいかにして河を渡るのかというダンクワルトの質問に対して、

「二度とそのようなことはあるまい」(1582,4)と答えるハゲネはさらに続けてほかの者たちにも滅亡の自覚を促す(1583)。まさにこの不屈の英雄精神のためにフォルケールはハゲネを尊敬するようになり(1584)、両者の間には揺ぎない友情が芽生えてくる。それはもちろん、例えばあとで述べるイーヴェインとガーヴェインの間のように共に生を構築するといった友情ではなく、共に戦い死ぬといった友情である¹⁹⁾。このように滅亡の運命を悟っても、フォルケールと共に英雄的なものへと自らを高めるハゲネは、寄せて砕ける波の中の巖であり、揺ぐことのない英雄となったのである。フン族の国に到着してこのハゲネが中心人物となるのは必定である。彼は今や単なる防衛という消極性に甘んじる男ではなく、クリエムヒルトの挑戦に反抗するという態度を見せる。ジーフリトの剣を持ってクリエムヒルトの前に現われる挑発的な態度(1783-4)等がそれである。以後、いかなる苦難にあってもハゲネは決して揺ぐことのない勇士であるが、その中でも最も彼の強さを明示しているのが最終場面である。疲労のために捕えられてクリエムヒルトの前に突き出されたハゲネは、財宝のありかを尋ねられても国王兄弟との誓約を持ち出すことによって、ついにはクリエムヒルトにグンテル王の首を刎ねさせ、財宝の秘密を自分だけのものにする。勝利の象徴である財宝のありかを明かさぬまま滅びていったハゲネは、巖のように揺がぬ英雄として不屈の精神を絶対化の中で強く生きたのである。例えば、ジーフリトやディエトリーヒはなるほどハゲネより外面的により強く理想化されて語られているが、しかし、内面的な強さと不屈の精神においてはハゲネが疑いもなく第一人者である。ハゲネは生まれつきの暗さを絶対的な暗さにまで押し進めたのであった。詩人によってハゲネの形容詞としてたびたび用いられているgrimmeも、「地下」と「悪魔」の意味を含んでいる²⁰⁾。ハゲネの不屈の精神はまさに暗い悪魔の力であるということを詩人はその語でもって常に認識していたのではないか。ハゲネのêreはまさにデモーニッシュなものと結びついており、ハゲネのêreあるところ常に悪魔が潜む暗黒の世界なのである。

5. リュエデゲールのêre — あらゆる美德の父の死 —

クリエムヒルトの再婚の際に重要な役割を演じているリュエデゲールにおいてもêre(名誉)の観念がとりわけ重要であることは、ハゲネの場合と同様である。しかし、獷猛なハゲネとは逆に、リュエデゲールはまずは「気高く品位ある騎士」として登場する。彼の特性はエッケワルトの言葉の中で明確に表現されている。

《Der sitzet bi der strâze	und ist der beste wirt,
der ie kom ze hûse.	sîn herze tugende birt,
alsam der süeze meie	daz gras mit bluomen tuot.

19) Vgl. Gottfried WEBER: Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963. S.48-9.

20) Vgl. ebd. S.57. u. auch S.239-41.

swenne er sol helden dienen, sô ist er vrcelich genuot.》(1639)

「あの方はこの街道筋に居を構えており、世に住む人のうちでも最も立派な城主です。彼の胸が徳性を^{はぐく}育むことは、さながら快い五月が草木の花を育てるに似ており、武士たちの世話をすることが、あの方には欲びなのです。」

客人たちを優雅にもてなすことは彼にとっては大きな名誉だったのである。しかし、この名誉感情のために彼は悲惨な状況へと追い込まれてゆく。ブルゴント族とフン族との戦いとなったとき、名誉にかけて彼はブルゴント族を相手に戦うことはできない。ブルゴント族は彼がベッヒェラーレンで歓待したばかりか、フン族の国へと案内した客人でもあり、さらに娘を王弟ギーゼルヘルに嫁がせる約束をも取り交わした間柄だからである。しかし、一方フン族のエッツェル王には臣従の義務があり、またクリエムヒルトにはエッツェル王求婚の際に真心より誓った誓言があるので、彼はフン族の国王夫妻を見捨てることもできない。名誉はまさに彼の運命の分かれ目である。クリエムヒルトが彼にかつての誓いを思い出させて助力を願い出ると、彼は名誉 (êre) と魂 (sêle) を区別してこう嘆く。

《Daz ist âne lougen: ich swuor iu, edel wîp,
daz ich durch iuch wâgte êre unde ouch den lîp.
daz ich die sêle vliese, des enhân ich niht gesworn.
zuo dirre hohgezite braht' ich die fürsten wol geborn.》(2150)

「あなた様に名誉 (êre) や生命をも捧げるとお誓い申し上げたことは否みは致しませぬ、気高いお妃様。しかし魂 (sêle) までも犠牲にするとは誓いませんでした。私はあの生まれ貴い王様方を自分でこの饗宴にお連れ申したのでございます。」

このように悩むリュエデゲールに対して、クリエムヒルトとエッツェル王が二人して彼の足もとにひざまづいて嘆願するに及んでは、リュエデゲールの嘆きは頂点に達する。

《Owê mir gotes armen, daz ich dize gelebet hân.
aller mîner êren der muoz ich abe stân,
triuwen unde zûhte, der got an mir gebôt.
owê got von himele, daz michs niht wendet der tût! (2153)

Swelhez ich nu lâze unt daz ander begân,
 sô hân ich boesliche unde vil übele getân:
 lâze aber ich si beide, mich schiltet elliu diet.
 nu ruoche mich bewîsen, der mir ze lebene geriet.》(2154)

「ああ、このような目にあうとは、なんと^{みじ}惨めな身であろう。
 あらゆる名誉をなげうち、神に授けられた信義も礼節も
 捨ててしまわねばならぬとは。天つ神も哀れとおぼせ。
 死んでしまったらこうした目にも会うまいに。

どちらかを捨てて、他の一つを行っても、私は悪いやつ、
 怪しからぬ男といわれましよう。さりとて両方とも捨ててしまえば、
 世の人みんなが私を罵るでしょう。
 私に生命を与え給うたものよ、どうぞ教えを垂れて下さいまし。」

リュエデゲールの真の êre (名誉) の根底にあるものは sele (魂) であって、財産・権勢ごときものではない。真心 (triuwe) を失ってこの場で死ぬくらいなら、領土も城も全ての財をも投げ捨てて、もって生まれた足で異国へさすらいの旅に出かけたい (2157) ことはテキストからも明白である。しかし、この望みはリュエデゲールにとって可能ではない。国王と臣下の絆は断ち切れないほど強いものであり、さらに国王夫妻は彼にますます援助を願い出るからである。このようなリュエデゲールの「苦悩」(2159-61) に対してクリエムヒルトが無慈悲な要求を続けたとき、彼の決意も定まった。それはもちろん討死の決心である。

er sprach: «ir sult iuch wâfen, alle mine man.
 die küenen Burgonden die muoz ich leider bestân.》(2167,3-4)

彼はいった、「わが勇士の面々、みんな武装をととのえるのだ。
 わしは不本意ながら、ブルゴントの勇士たちと戦わねばならぬ。」

ここでリュエデゲールは身も魂も賭けることとなった (2166,1) ののである。しかし、まさにこの瞬間ハゲネの場合と同様にリュエデゲールの内からも英雄的なものが生成してきたのであり、討死を望んで破滅の戦場へと向かう彼は、もはや宮廷的騎士ではない。勇敢にして誉れ高い武将たるに恥じない働きぶりを示すリュエデゲールの行為は、まさに古代ゲルマンの英雄さながらの行為である。滅亡すべき宿命を感じ知るに至っても回避せず、反対にその運命に向かって突き進

んでゆく異教的・ゲルマン的英雄という点でリュエデゲールの *êre* はハゲネの *êre* と同じである。その限りにおいては、詩人によって賛嘆されるリュエデゲールの「美德」(tugent) は古い意味に属する「英雄的行為」²¹⁾ を意味していると言えよう。

しかし、彼の「美德」(tugent) は単なる「英雄的行為」のみならず、宮廷的な「気高き徳性」(hochherzige tugent) をも意味している——この点ハゲネとは異なる——ことはもちろんのことである。それが最も明らかになるのが楯贈与の場面である。自らの楯を気前よく贈与するという高貴な心は宮廷的基盤において成長した花である²²⁾。このリュエデゲール最後の贈物に接して心を動かされたハゲネの動揺も、リュエデゲールのこの「宮廷的美徳」を強調するものである。このようにリュエデゲールの死の中には異教的・ゲルマン的なものと宮廷的なものとが素晴らしく融合しているのであり、その両方面からの tugent に支えられて彼は辛うじて彼の *êre* (名誉)、つまりはその根底にある *sêle* (魂) を救っているのである。しかし、その魂の救いは例えばあとで述べるハルトマンにおけるようなキリスト教的なものではなく、結局はそれが英雄的な死と結びついているところにリュエデゲール悲劇の特質があり、その限りにおいてはジーフリの *êre* 及びハゲネの *êre* と一致するところがある。いずれにせよ *êre* が結局は破滅へと通じているという点において、この『ニーベルンゲンの歌』の英雄たちの *êre* はハルトマンのアルトゥース・ロマーンにおける *êre* とは本質を異にするものである。『ニーベルンゲンの歌』における英雄たちの *êre* をさらにはっきりときわだたせるために、次にハルトマンのアルトゥース・ロマーンにおける主人公たちの *êre* の特質を考察してみることにしよう。

II. ハルトマン作『エーレク』における *êre* の構造

1. エーレクの *êre* —— 競技とミンネ ——

ハルトマンの最初のアルトゥース・ロマーン『エーレク』(1180-85)²³⁾ —— フランスのクレチアン・ド・トロワの作品『エルクとエニド』(1170) を翻案したもの —— においても *êre* という概念は、『ニーベルンゲンの歌』と同様に重要である。全体のあらすじはこの *êre* を求めての物語であると言ってもよいであろう。冒頭で語られる「白鹿」狩りも「はいたか」競技も *êre* を求めての競技である。前者はカラディガン城のアルトゥース王によって催され、「白鹿」(den wîzen hirz, 1757) を射た者には宮廷一の美女に接吻できるという名誉 (*êre*) が与えられる。後者はトゥルメインと呼ばれる城で、その城主イーマーイーン公が催しているもので、決闘に勝つと、

21) Vgl. Matthias LEXER: *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. 33. Auflage. Stuttgart 1972. S.233. (tugent = Männliche Tüchtigkeit, Kraft, Macht, Heldentat.)

22) Vgl. Hans NAUMANN: *Rüdegers Tod*. DtVjs.10, 1932. S.399.

23) テキストは Albert LEITZMANN (Hrsg.): *Hartmann von Aue, Erec*. 5. Auflage besorgt von Ludwig WOLFF. (Max Niemeyer Verlag) Tübingen 1972. を使用し、邦訳は平尾浩三訳(郁文堂刊「ハルトマン作品集」)を引用するが、字数等の都合から表現を若干変えるところもある。

自分の連れた婦人が第一の美女であると証明され、その婦人が銀の竿の先端にとまっている「はいたか」(sparwære, 189)を得ることができるという競技である。さて、若き騎士エーレクは、アルトゥース王の妃ギノヴェールの伴をして前者の「白鹿」狩りに出かけた際、婦人と矮人こびとを連れた見知らぬ騎士に出遭い、名前を尋ねたところその矮人から鞭で打たれるという恥辱(leit, 111)を受ける。これは王妃の榮譽(êre)のみならず、エーレクの騎士としての名誉(êre)の侮辱(leit)である。まさにこの屈辱(unêre, 107; schande, 116; sîn leit, 220)の報復のため、また王妃の栄光(êre, 134)のために、エーレクはその騎士の跡を追って旅立ち、トゥルメイン城へとやって来る。エーレクに恥辱を加えた騎士は、すなわち、すでに二度も連れの婦人のために「はいたか」を獲得していたが、三度目もわがものばかり、揺がぬ名誉(êre, 209)を求めて、今またこの城にやって来たのであった。この騎士イーデールスと「はいたか」競技のことをエーレクがその日の宿泊所となった廃屋の翁から聞き知ると、エーレクは決闘の決意をして、勝利を取めた場合には翁の娘エーニーテを妻にする約束をする。従って、恥辱(leit, 481; grôz laster, 488)の復讐(gerechen, 491)のための決闘が、「はいたか」、すなわち、エーニーテの美と愛を賭けた闘いとなったのである。翌朝行われた決闘は、接戦ののち、エーレクの勝利に終わり、エーレクは自らと王妃の名誉(êre)を回復すると同時に、エーニーテのために「はいたか」をも手に入れる。エーニーテは翌朝エーレクとともにアルトゥース王の宮廷へ向かい、この二人の初めての旅において二人の間にはミンネ(minne)が芽生えてくる。アルトゥース王の宮廷に到着すると、エーニーテは最高に美しい乙女であるとされ、今や彼女がこの宮廷で最高の美女、否、世界で最高の美女たることに誰も異論をはさまず、先に行われた「白鹿」狩りで権利を得ていたアルトゥース王が口づけしたのもエーニーテである。「はいたか」競技のみならず、「白鹿」狩りでもその美が認められて二重の榮譽に輝いたエーニーテは、さらにのちには天使(engel, 1843)にも喩えられ、その美しさと高貴な姿にエーレクの胸がかき乱されたのも当然であった。そこで二人を支配していたのはミンネ(diu Minne, 1859)だったのである。こうしてエーレクとエーニーテの二人は聖霊降臨祭の日に結婚式を執り行い、エーニーテはその美で、エーレクはその武者ぶりでそれぞれに最高の賞賛を得たのち、アルトゥース王のもとを去って故国カルナントに帰ると、父より国の支配を委ねられ、ついにはエーレクは王、エーニーテは王妃の座につくことができたのである。

しかし、二人が到達したかに見えたこの最高の榮譽(êre)は長続きしなかった。カルナントに帰国してからは、エーレクは思いのこごとくを妻へのミンネに注ぎ、いかにすれば万事を快適にできようかと、そのことにのみ心を傾けている。彼の生きかたは変わったのである。

Êrec wente sînen lîp
grozes gemaches durch sîn wîp.
die minnete er sô sêre

妻にかまけて、エーレクの身は、
いと安楽なものに慣れ傾いた。
妻への愛はゆゆしくて、

daz er aller êre	ただ妻ゆえに騎士たるものの名声は、
durch si einen verphlac,	つゆかえりみられることもなく、
<u>unz daz er sich sô gar verlac</u>	<u>彼はついには騎士の本務を忘れてしまい、</u>
daz niemen dehein ahte	何びともはや彼には
ûf in gehaben mahte. (2966-73)	敬意を抱くことはできなくなった。

彼の怠惰は宮廷全体に影響を及ぼし、宮廷はあらゆる喜びを失い、恥を晒していた(2988-90)のである。この悪評がエーニーテの耳にも達したとき、彼女は憂いを胸に抱いて耐えていたが、夫が眠っていると思った寝室で、深い溜め息をついて思わず憂いを口の端にもらしてしまふ。ところが、エーレクはそれをはっきりと聞き取り、彼女の憂い(sorgen, 3036)について詰問する。エーニーテの打ち明けによってエーレク自身の耳にも人々の悪評が入って、エーレクはいともたやすくêreを失ってしまった。しかし、このêreは、あの矮人こびとによる鞭打ちのときとは全く異なつて外側から奪われたものではない²⁴⁾。名誉の喪失は今や加えられたleitではなく、名誉はエーレクの倫理的怠惰、「騎士としての本務を忘れた」(sich verligen, 2971)こと、つまりはエーレクの落ち度によって失われてゆくのである²⁵⁾。これは『ニーベルンゲンの歌』におけるleitとは異質のものであり、ここに『エーレク』特有の苦難の旅が始まる。エーニーテは夫の前を進み、何を聞こうと何を見ようと、口をきくことを禁じられたまま、旅を続けなければならないのであるが、一体、この旅は何を意味するのであろうか。以下、エーレクの冒険を考察し、作品全体におけるその役割を探ることにしよう。

2. エーレクの冒険 — arbeit と triuwe —

第一日目の冒険

旅に出てまず第一夜、エーレクとエーニーテは森の中で二度にわたって盗賊に襲われる。最初は三人の盗賊、二度目は五人の盗賊によってである。いずれの場合にも盗賊にまず気づいたのは、夫の前を歩くエーニーテである。エーニーテは、旅の途上何を見ても口をきいてはならない、口をきけば命はない、と命令されてはいるものの、警告しないと夫は盗賊たちの不意討ちに遭ってしまう。二者択一に迷ったのち、エーニーテは二度とも、立派な殿の命が失くなるよりは自分の命が失くなる方がよい(3168-79; 3353-77)という決断を下し、誠実の心(triuwe, 3184; 3262; 3415)から夫に警告する。この妻の警告によってエーレクは二度とも命拾いをするが、命令違反の罰として妻には馬丁の役が与えられ、彼女は全部で八頭の馬の面倒を見なければならない。これはエーニーテにとって苦難(arbeit)であるが、彼女はこの苦役に耐える。二人が初めて馬を進めた先の幸せな旅とは対照的に、今回の旅は苦難(arbeit, ungemach)に満ちたものであるにも

24) Vgl. Fr. MAURER : a.a.O., S.44.

25) Vgl. ebd.

かかわらず、エーニーテは全てのことを耐え忍び、夫に誠実を示すところに喜びを見出してゆく。この苦難 (arbeit, ungemach) の旅の中にエーニーテの誠実 (triuwe) がありありと読み取られるところにこの一連の冒険の特徴があると言えよう。

第二日目の冒険

二人の旅はこのように苦難の旅として特徴づけられる。彼らの求めるものは難儀 (arbeit, ungemach) であり、安楽 (gemach) ではないということは、翌日、ある伯爵 (ガロエイン)²⁶⁾ からその城に逗留するようにと出迎えられた際にも明らかである。その出迎えを辞退して、彼らは旅宿に宿泊する。しかもその旅宿では、エーレクはエーニーテと一緒に食べることも一緒に寝床に就くことも許さなかったのである。一方、逗留を拒まれた伯爵はこの旅人たちとは正反対のものを求める誘惑的な人物として描かれている。エーニーテの美しさに心を奪われて、旅宿へ赴いてエーニーテを口説く言葉は、華やかな生活への誘惑ばかりである。しかし、誠実なエーニーテはその誘惑に屈せず、今回も自分の命より夫の命の方が大切だという決断を下して、誠実 (triuwe, 3993) の命ずるままに、夫の前に跪いて一部始終を語る。そのためエーレクは伯爵の真夜中の攻撃を退けたのであるが、しかし、エーニーテは逃げる途中再び夫から叱責を受ける。二度と繰り返さぬことを誓うや否や、またエーニーテはその誓いを破ることとなる。つまり、彼女は伯爵が大勢の助太刀を伴って追いかけてきたことにすぐさま気がついたのである²⁷⁾。このときも、誠実の結ぶ絆 (der Triuwen bant, 4145) が求めるままに、彼女はすぐに誓いを破ったのであり、そのためにエーレクは不意討ちに遭わずに、伯爵を打ち倒すことができた。それにもかかわらず、エーレクはエーニーテの度重なる違背を咎めたが、叱責は今までよりも増して激しかった。エーニーテは繰り返さぬことを改めて誓ったものの、やはりそれをまた次の冒険で守らぬこととなる。

第三日目の冒険

これまでの苦難は、しかし、これから起こる危険と苦難 (nôt und ungemach, 4273) に比べれば些細なものである。道を進んでゆくうち、次に攻撃を仕掛けようとしていた敵は、今までのような盗賊 (roubære) でも、また伯爵 (grâve) でもなく、アイルランドの小男にして勇敢なる国王 (küneec) ギフレイスであったからである。冒険は回を重ねるごとにますます危険なものとなってくるのである。彼方から激しく接近してきたギフレイス王は、エーレクの難儀 (arbeit, 4363; 4367) を知りながらも決闘を申し込む。もはや闘うはかすべなしと認めたエーレクは、相

26) クレチアンの作品ではこの伯にガロエインという名前がつけられているが、ハルトマンでは名前なしである。

27) 気づくことにおいて夫人の方がいつも早いのは、夫人は無防備であるのに対して、夫は武装しているからである。このことをハルトマン自身が説明している (4150-65)。

手と力を競うが、相手の一撃がエーレクの脇腹を襲い、エーレクは傷を受ける。しかし、エーニーテの言葉（4426-8）に勇気づけられて——これもエーニーテの誠実さと受け取れよう——エーレクは、相手にも痛手を加えて自分の前に倒してしまう。しかし、今までの冒険と異なるのは、エーレクは相手を殺してしまうのではなく、反対に友人を得ることになったことである。闘いを終えたエーレクとギフレイス王との間にはつまり友情が生まれてきたのである。二人はこもごも相手の受けた傷を嘆き、それぞれの軍衣を引き裂いて相手の傷口に包帯をした。誠に友情溢れる行為である（4491）とハルトマンも語っている。闘いに負けたギフレイス王は休息のため彼の城に滞在するようエーレクに請うが、エーレクは、この旅で求めているのは安楽（gemach, 4576）ではないと言って、その晩はそこに滞在したものの、翌朝にはギフレイスの城をあとにする。

第四日目の冒険

こうして苦難の旅を続けているうち、二人は、アルトゥース王が遊猟のために野営の陣を張っていた森へとやって来る。アルトゥース王はエーレクを迎えるべくガーヴェインを遣わせるが、しかし、ガーヴェインに会ったエーレクは、今はあらゆる安楽（gemaches, 4978）を身から断たねばならないと述べて、それを辞退する。安楽を求めぬエーレクの堅い意志を見抜いたとき、ガーヴェインは、王が先回りするまで、話の花を咲かせて時を費やすことによって、エーレクをアルトゥース王に謁見させた。エーレクはこのガーヴェインの策で、アルトゥース王のもとに一時とどまり、傷ついた身体を疲労から休めはしたものの、それ以上の饗応は受けず、王と王妃の頼みさえも辞退して、翌朝にはまた旅立つ。

一連の冒険とは趣を異にするこのアルトゥース王の野営における一時休息は、一体何を意味するのであろうか。この一時滞在の挿入で明らかなことは、騎士たる者の窮極的な目的地はアルトゥース王の宮廷であるということである。そこには騎士としての最高の榮譽が待ち受けている。エーレクもその榮譽を目指していることは言うまでもない。それにもかかわらず、ここでエーレクがアルトゥース王のもとに長くとどまらなかったということは、彼の身体に受けた傷のみならず騎士としての傷もまだ完治せぬことの象徴であると解することができるのではあるまいか。アルトゥース王並びに王妃ギノヴェールはなるほどエーレクのその「傷」を和らげることができたが、しかし、完全に治すことはできなかった。エーレクはまだなお冒険の旅を続けなければならないのである。しかし、エーレクの旅には少しも進展がなかったというのでは決してない。エーレクは今や、宮廷に姿を見せる者には身を辱しめぬ振舞いの必要なこと（5056-8）を悟っているのであり、事実、この一時休息を契機に次の冒険で徐々にエーレクの内面的浄化の過程が明らかになってくるのである。

第五日目の冒険

エーレクが旅に出て第五日目に経験する冒険は、これまでの第一日目から第三日目までの冒険を一日のうちに繰り返すという意味を持っている。それゆえ冒険も以前のものより一層危険なものとなるが、しかし、それだけに浄化の過程も大きく進展すると言える。その日のまず第一の冒険は、困窮した騎士カドクのために行う二人の巨人との闘いである。暴力をふるう二人の巨人は第一日目の冒険における粗暴な盗賊たちに相当するが、今回のエーレクの冒険は、困窮している者あるいは弱き者を支援し助け出すという模範的な騎士として決闘に臨むのであり、今までのような自己本位の行動ではなく、活動的にいわば「社会」へ参加し始めたと言える²⁸⁾。騎士カドクを解放したエーレクは、しかし、疲労困憊のため再び傷口が開いて妻の前で意識を失ってしまう。夫が死んだものと思ったエーニーテは、自らも命を断とうとして夫の剣で自らの身を刺そうとするが、そこに現われたリーモルス城のオリングレス伯にその行為を阻まれる。エーニーテの美しさに魅せられたオリングレス伯は彼女を妻にしようと企む。このオリングレス伯の誘惑は第二日目の伯爵（ガロエイン）の誘惑に相応するが、しかし、華やかな妃としての将来を約束する今回の伯爵の誘惑にも、エーニーテは決して惑わされず、夫への堅固な誠実を見せる。この拒絶に怒りを覚えたオリングレス伯の誘惑は以前の伯爵（ガロエイン）の誘惑よりも粗暴なものとなってゆくが、この伯爵の暴力に対しても、夫人は打たれて喜ぶ（6552-3）ことになる。夫が死んだと思っている今は、生きてることよりも死ぬことを彼女は千倍も強く望んでいたからである。この伯爵の暴力に対するエーニーテの誠実な叫び声によって、エーレクは目覚める。彼は、怒って人々の中へ飛び出し、最初の一撃でオリングレス伯と二人の男を打ち倒した。他の者は逃げ去ったが、それも当然であろう。死神が怖わかったからである。ただそこにとどまる勇気のあったのは、エーニーテ夫人ただ一人で、彼女はそれどころか大喜びである。エーレクは妻の誠実で生き返り、エーニーテは夫の助けで救出されたのであり、双方ともに死に直面してようやく二人の和解が成立するのである。エーニーテが夫に伯爵の誘惑の一部始終を涙ながらに打ち明けたとき、夫が妻に課していたあの厳しい仕打ちが一瞬にして終わりを告げた。夫は妻を連れてカルナント城を出て以来、彼女とは一切口をきかなかったが、それが今こそ終わったのである。エーニーテの誠実が今や夫にしかと確かめられたからである。その場面をハルトマンは次のように語っている。

durch daz diu spæhe wart genomen,
des ist er an ein ende komen
und westez rehte âne wân.
ez was durch versuoehen getân

あのように態度を偽り、
探索しようとしたものを、
彼は今や明らかに、疑いの余地もなく確かめた。
彼女が彼の正しき妻であるかどうか、すべては

28) Vgl. Peter WAPNEWSKI: Hartmann von Aue. 7. ergänzte Auflage. Stuttgart 1979. S.56.

ob si im wære ein rehtez wip.
 nû hâte er ir lip
 ersichert genzlichen wol,
 als man daz golt sol
 liutern in der esse,
 daz er nû rehte wesse
 daz er an ir hæte
 triuwe unde stæte
 unde daz si wære
 ein wip unwandelbære. (6778—91)

それを知るためになされたことであつたのだ。
 黄金を溶鉱炉で
 純化するように、
 彼は彼女の人柄を、
 完全に試しおえたのである。
 今や彼にはしかとわかつた。
 彼女が彼に
 貞節と誠実を捧げており、
 心揺がぬ
 妻なることが。

今までの苦難の旅はエーニーテの誠実を確かめるための試し (versuochen, 6781) の旅であつたことがここで明らかである。しかし、この記述から一連の冒険を単にエーニーテの誠実の試しとだけ解してはならない。夫と妻とが互いに隔てられた状態で続けられる苦難の旅は、エーレクにとってこれまでの安楽、つまり、ミンネに溺れ騎士としての本務を怠つたこれまでの彼の安楽に対する償いの旅であり、そのミンネと騎士道の調和を求めての試練の旅だったのである。そこでエーレクが数々の冒険を通して知り得たことは、妻の警告なしにはエーレクの騎士としての生命は維持されえなかつたということである。このことをエーレクはエーニーテの誠実を確かめることで悟ることができたのであり、このことは彼が騎士としても内面的に成長したことを意味している。黄金を溶鉱炉で純化するようにエーニーテを完全に試し終えることによって、エーレクもまた純化されることとなつたのである。従つて、エーニーテの誠実な叫びによるエーレクの先程の目覚めは、エーレクが新たに生まれ、別の生になつた²⁹⁾ことを意味していると言ふことができよう。

この再生に結びつけられたエーレクの内面的な成長は、さらに次のギフレイス王との二度目の決闘でより一層明らかとなる。つまり、リーモルス城を逃げ出て来た一人の小姓から奇しきことを聞いたギフレイス王は、友のエーレクが危険に晒されていると思つてリーモルス城へと向かうが、その途中でエーレクとギフレイス王とは相手を知らずして闘う羽目となる。この冒険は無論第三日目のギフレイス王との闘いに相当するが、しかし、エーレクはこのたびの決闘では疲労のためにギフレイス王に敗れてしまう。一連の冒険においてことごとく勝利を収めてきたエーレクのこのたびの敗北は一体何を意味するのだろうか。殊にエーレクが生まれ変わった段階での敗北だけに重要であるが、以前の決闘と今回の決闘を比較してみても明らかになることは、この二つの決闘においてエーレクとギフレイス王の役割が取り替えられていることである³⁰⁾。すなわち、以

29) Vgl. ebd.

30) Vgl. ebd. S.57.

前自惚れ強く戦闘意欲に満ちていたギフレイス王は、そのために敗北を喫したが、ここでは友を助けにゆく途上で道をあけるためという道徳的な動機から闘うのであり、そのために勝利を得る。一方エーレクは、以前の闘いでは平和的に和解を試みており、そのために勝利を得たが、ここでは疲労しているにもかかわらず単なる戦闘意欲から勝利のみを欲しているのだから、決闘には敗れてしまう。従って、今回のエーレクの敗北は、エーレクのこれまでの苦難 (ungemach) に満ちた冒険の旅においてもまだなお unmäßze (慎みのない思い上がり) があったことを実際に示している³¹⁾ と言えよう。冒険を行う騎士の高慢な思い上がりは、騎士的理想の美しい秩序への違反であり、これは愛への自己本位な献身と同じことである³²⁾。愛の享受ゆえにただ愛するだけの人が恥辱を被るように、戦闘意欲のためだけにのみ闘う人は敗北を喫してしまう³³⁾ ことをエーレクはここで悟ったのである。こうして内面的に成長したエーレクは、さらにギフレイス王の二人の妹とエーニーテの看護で自らの身体の傷をも治すことができたのである。しかし、エーレクの冒険の旅はこれで終わったわけではなかった。エーレクが内面的成長を遂げただけではまだ真の榮譽 (êre) は得られない。エーレクはその騎士としての力を社会のために実行しなければならないのである。真の榮譽 (êre) を求めてエーレクは十四日後、また妻のエーニーテと友人のギフレイス王を伴って旅に出たのである。

3. 「榮譽」の寵臣エーレク — des hoves vreude —

こうしてエーレクら一行が旅に出てまず考えたのは、アルトゥース王に伺候することであったが、彼らは思いがけずブランディガン城と呼ばれる城にやって来る。ここでエーレクが体験するマボナグリーンとの決闘は最後でかつ最大の冒険であり、これまでの試練のいわば総まとめであり、仕上げの冒険とも言えよう。騎士マボナグリーンは、すなわち、その城の下にある樹園に一人の恋人と住んでいるが、これまで彼に戦いを挑んできた八十名の騎士を全て討ち倒したので、今や八十名の未亡人が悲しくその城の片隅で暮らしているというのである。この話を聞いたエーレクは、怯むどころか、この冒険を「栄光に通ずる道」(der Sælden wec, 8521) だと理解し、それを「神の下された恵み」(genædeclīchiu dinc, 8537) だと自ら口にして、一騎で樹園の中へと入ってゆき、マボナグリーンと決闘を繰り広げるのである。両者の闘いが愛の抱擁に喩えられている(9103-17)のも決して無造作な表現ではない。この闘いは真のミンネのかたちを求めての闘いなのである³⁴⁾。馬から大地に下り立って延々とこの決闘を繰り広げる二人の勇士に力を与えたのもそれぞれの婦人のミンネである。

31) Vgl. ebd.

32) Vgl. ebd.

33) Vgl. ebd.

34) Vgl. Hugo KUHN: >Erec<, 1948. In: Hartmann von Aue. WdF359. Darmstadt 1973. S.36.

ob im dehein zwîvel geschach,
 swenne er si wider ane sach,
 ir schoene gap im niuwe kraft,
 sô daz er unzagehaft
 sîne sterke wider gewan
 und vaht als ein geruoweter man.
 des enmohte er niht verzagen.
 sô wil ich iu von Êrecke sagen:
 Êrec, ze swelhen zîten
 er gedâhte an vrouwen Ênîten,
 sô starcten im ir minne
 sîn herze und ouch die sinne,
 daz er ouch mit niuwer maht
nâch manlicher tiure vaht.

彼(マーボナグリーン)の心がひるんでも、
 夫人をふたたび見さえすれば、
 美しい妻の姿から、夫はみずみずしい力を得、
 揺らぐ心は消え去って、
 ふたたび強さを取り戻し、
休息しきった男のように闘うのだ。
 このようにして、彼は決してひるまない。
 だが、エーレクに関しても、皆の衆、拙者は
 同様に申し上げる。エーニーテ夫人を
思うだけで、彼の心と五体には、
 ミンネが強さを与えるので、
 彼もみずみずしい力に満ちて、
優れた男子たるの限りを尽くし、
 闘うという次第である。

(9174-87)

エーレク夫妻のミンネの方が優れている³⁵⁾ことは下線部の対比から自ずと明らかである。美しい妻を思うだけで、エーレクには力が湧いてくる(9230-1)のである。こうして優れたエーレクがついに敵マーボナグリーンを地面に押しさえつけて勝利を収めるが、彼は敗者にあわれみを見せて命を助ける。二人は互いに武装を解き合うと、敵意は消え去って、草地にすわってそれぞれの身の上を語り合う。このときエーレクはマーボナグリーンの境遇の中に過去の自分を見出し、彼にこの樹園から出てゆくことを忠告するが、この忠告でもってエーレクがカルナントにおける自分の過ちをほのめかしていることは明らかである。すなわち、エーレクとエーニーテは、「はいたか」競技のあと模範的な夫婦であったにもかかわらず、カルナントに帰国してからは愛を享受することのみ閉じ籠もってしまったがために、榮譽(êre)を失ってしまった。このかつてのエーレクの状態が今のマーボナグリーンの姿である。マーボナグリーンはこれまでの決闘で全て勝利を収めてきた勇士であり、またその恋人も美しい女性であってこの二人の中には確かに「宮廷文化」の二つの最高の価値、つまり、ミンネと騎士道が具象化されている³⁶⁾が、しかし、そこには「宮廷の喜び」の本質が奪い取られている。二人が住むその樹園は、彼らの自己満足的な孤立生活の中で枯れ果てているのであり、「喜び」(schoener vreuden, 9595)は全て奪い取られている。ジョイエ・デ・ラ・クルト(Joie de la Curt)、つまり「宮廷の喜び」(des hoves vreude)は、孤

35) Vgl. Petrus W. TAX : Studien zum Symbolischen in Hartmanns Erec. Erecs ritterliche Erhöhung. Wirkendes Wort 13, 1963. S.283.

36) Vgl. P. WAPNEWSKI : a.a.O., S.58.

立の中から生まれることはありえず、社会と関わり合っ^て初めて繁栄することができるのである³⁷⁾。このことをエーレクは、「人々と交わることはよいことである」(bī den liuten ist sō guot, 9438)という言葉で述べている。真に完全なミンネとは、それを所有し享受することに閉じ籠もることではなく、世間で認められ確証された愛のことである³⁸⁾。夫は閉じられた喜びの庭から出てゆき、社会においてその騎士としての本質を証さねばならない。ミンネと騎士道とが調和を保ち得るのは、それらが「社会」と交わるときであり、そこに初めて「宮廷の喜び」が生まれてくる。マーボナグリーンにとっても初めて喜びが得られるのは、その閉じられた樹園から出てゆくことができるときであり、それが今やエーレクの勝利によって可能となったのである。すなわち、恋人との約束——この樹園での愛の生活に終わりがあるとすれば、それは一人の男子が彼に勝ったときのみであるという恋人との約束で、これまでその樹園から出てゆくことの出来なかったマーボナグリーンは、今やエーレクに敗れて初めて真の騎士となることができたのである。従って、エーレクの勝利は幾重もの意味を持っている。自分自身を救ったのみならず、エーニーテを八十名の未亡人のような境遇から免れさせたのであり、それと同時にマーボナグリーンをその恋人の束縛から救い出し、その樹園に「宮廷の喜び」を取り戻させることとなったのである。

一方、マーボナグリーンの敗北を嘆いていた彼の恋人も、エーニーテ夫人によって慰められているうち、エーニーテ夫人と直接の姉妹同志であることが分かり、この新たな事実を人々は賞でたき神の配慮としてほめ称える。こうしてその樹園に戻ってきた「宮廷の喜び」は、さらにエーレクの二重のあわれみによって高められる。樹園で斬り落とされていた騎士たちの首を杭の先から下ろして埋葬させたのみならず、八十名の未亡人たちをアルトゥース王のところへ連れてゆくという行為によって「宮廷の喜び」を高めたのである。エーレクはあわれみを知る人である(9785)。この慈悲深い行為によってエーレクはアルトゥース王の城で大歓迎を受け、アルトゥース王自身の口から次のような賞賛を得る。

《Êrec, lieber neve mîn,
dû solt von schulden immer sîn
geprîset unde gêret,
wan dû hâst wol gemêret
unsers hoves wünne.
swer dir niht guotes gûnne,
der enwerde nimmer mêre vrô.》

(9944-50)

「エーレク、わが愛する甥よ、
そちは今後いつまでも、
賞賛と名誉に包まれて然るべし。
そちはわが宮廷を、
いっそう輝かしきものとしてくれた。
そちに良きことのあれと願わぬ者には、
決して幸はないであろう。」

37) Vgl. ebd.

38) Vgl. H.KUHN : a.a.O., S.37.

居並ぶ人々も口を揃えて「その通り」(âmen, 9951)とエーレクを称える。âmenという語で最後が飾られているこのエーレクの賞賛は、宮廷びとの皆の前で述べられたアルトゥース王自身の口からの賛辞であり、これに勝る栄誉(êre)はないであろう。今やエーレクはまさに「栄誉」の寵臣エーレク(Êrec der Êren holde, 9963)なのである。

やがて父の訃報を受け、アルトゥース王から暇をもらい、友のギフレイス王とも別れを告げて、故国カルナントに帰国したエーレクは、人々から大歓迎を受け、さらに「奇跡を行くエーレク」(Êrec der wunderære, 10045)とも表現されて称えられている。詩人ハルトマンも神がエーレクを故国へ送り返した(10054)と語っている。その宴の席で真の国王として王冠を戴いたエーレクは、今や神と人間の相互作用を知っているのであり、彼に割り当てられた名誉と恩寵を神のお陰だと神に感謝の念を示すのである³⁹⁾。神に敬虔な気持ちを捧げるエーレクは、今やエーニーテとともに、ミンネと騎士道とが完全に調和を保つ生活を送ることができるのであり、妻への愛ゆえに懶惰^{らんだ}の床に溺れきった昔の彼ではない。「栄誉」の寵臣エーレクには神から世の栄冠(der werlde krône, 10127)が授けられ、こうしてエーレクとエーニーテの二人は完全な栄光(êre)に到達することができたのである。

Ⅲ. ハルトマン作『イーヴェイン』における êre の構造

1. イーヴェインの êre — 冒険とミンネ —

ハルトマンの最後のアルトゥース・ロマーン『イーヴェイン』(1200)⁴⁰⁾ — 『エーレク』と同様クレチアンの作品『イヴェン』(1177)を翻案した — においても êre は重要な概念である。主人公イーヴェインにとっても êre は自分を駆り立てるものであり、従兄弟カーログレナントの失敗談を聞いたイーヴェインは、その従兄弟の恥辱の復讐をして騎士としての名誉(êre)を回復するため、アルトゥース王の率いる全軍勢に先んじて一人ひそかに泉の国へ出かけてゆくのである。泉の国に着いて不思議な石に水を注ぐと、そこの城主アスカローン王が現われて、激しい決闘となる。決闘はイーヴェインの勝利に終わり、アスカローン王は致命傷を受けて城の中へと逃げ込む。イーヴェインは騎士の心得も忘れて(âne zuht, 1056)、相手を追いかけて、さらに決定的な一撃を加えたが、しかし、城門に仕掛けられてあった二つの落とし格子の間に閉じ込められる結果となった。途方に暮れていると、小さな戸が開けられ、この国の王妃の侍女でルーネテという乙女が入って来た。彼女の話によると、致命傷の城主はついに死んでしまい、その王妃ラウディーネと家来たちは激しい憤りでいっばいだという。この乙女にとってもイーヴェインの行為はつらいものであったが、かつてブリタニエの国でイーヴェインから敬意を払ってもらったこと

39) Vgl. P.W.TAX : a.a.O., S.287.

40) テキストは G.F.BENECKE/K.LACHMANN (Hrsg.): Hartmann von Aue, Iwein. Neu bearbeitet von Ludwig WOLFF. 7.Ausgabe. Band 1 Text. (Walter de Gruyter & Co.) Berlin 1968. を使用し、邦訳は赤井慧爾・武市修訳(神戸女子薬科大学人文研究2-4号1974-76年)とリンク珠子訳(「ハルトマン作品集」郁文堂1982年)の二つを参照・活用する。

があったので、彼を憎むことのできない彼女は、不思議な指輪を与えてイーヴェインの身を護るのである。これを持っている限りは誰にも姿が見えなくなるというこの指輪のおかげで、イーヴェインは敵の仕返しを受けずに済むが、しかし、のちにその城主の妻から別の方法で「復讐」されることとなる。すなわち、悲しむあまりにラウディーネの身体があらわになっているところを見たイーヴェインは、彼女の髪と肌の美しさに心を奪われ、我を忘れてしまったのである。従って、彼のミンネの動機は『ニーベルンゲンの歌』のジーフリトの場合とは異なって官能的である。彼もジーフリトと同じようにミンネの苦しみを味わうが、しかし、ジーフリトのような「ミンネ妄想」ではない。イーヴェインの苦しみは、全てラウディーネの夫アスカローン王を殺したことに端を発している。アスカローン王を殺すことによって彼は冒険を成功のうちに収めたが、宮廷に帰ってそれを証明できなければ彼の名誉は失われる。しかし、立ち去ってその夫人の姿を見ることができないくらいなら名誉などどうでもよい。かと言って、ここに留まっても夫殺害のゆえに彼女の恩寵は得られまい。名誉とミンネの二つがこのように彼を悩ませたのである。この「苦しくも楽しい」というイーヴェインの言葉（1752-6）を賢明にも理解したラウディーネの侍女ルーネテの取り計らいで、イーヴェインはついにラウディーネと結婚することになるが、しかし、その際大きな決め手となったのは騎士の持つ武力である。すなわち、立派な騎士に護ってもらわない限り自分の国が滅びてしまうことを気遣った（2058-61）ラウディーネは、イーヴェインにこう言って求婚するのである。

《her Îwein, niene verdenket mich,
daz ichz von unstæte tuo,
daz ich iuwer alsô vruo
gnâde gevangen hân.(2300-3)

...

sît ir mînen herren hânt erslagen,
sô sît ir wol ein sô vrum man,
ob mir iuwer got gan,
sô bin ich wol mit iu bewart
vor aller vremder hōchvart.(2322-6)

...

ichn noetliche iu niht mē.》(2332)

「イーヴェイン様、私があなたを
こんなに早く許すというのは、
私に操がないからだ、
などと悪く取らないで下さい。

...

あなたは私の夫を倒したのですから、
きっと大変勇敢な方でしょう。
神様が私にあなたをお与え下さるなら、
私はあなたによって、どんな異国の
傲慢な侵入からも護られます。

...

私はもうあなたの敵ではありません。」

夫ジーフリトを殺害されてハゲネにその悲しみ (leit) の復讐 (rechen) をせずにはいられなかった『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトからすれば、この『イーヴェイン』の世界は正反対である。悲しみ (leit) を償う (ergetzen) ことはできない『ニーベルンゲンの歌』とは逆に、

『イーヴェイン』には神が介在しており、争いは好まないものであり、作品中の言葉を使って表現すれば、誠実に (mit triuwen) 悲しみ (leide) を償い (ergetzen)、辛い目にあわせただけその者を一層幸せにすることのできる (2069-72) のが『イーヴェイン』の世界なのである。とにかく二人はこうして結ばれ、手を取り合って宮殿の中に入っていくと、立派な騎士イーヴェインは家来たちからも歓迎されてこの国の主人となった。早速華やかな結婚の祝宴が執り行われた。やがてアルトゥース王の一行が到着すると、エーレクはこの国の城主になった経緯を語ったところ、アルトゥース王とその騎士たちは皆、イーヴェインが泉の国と名誉を得たのを見て喜んだ。王妃ラウディーネにしてみても夫のお陰でアルトゥース王に会うことも叶い、自分の選択が正しかったことを悟った。こうしてイーヴェインは冒険とミンネの二つを見事に克服して騎士としてこの上ない êre (名誉) を得たかに見えたが、しかし、親友のガーヴェインの忠告 (2770-912) によると、その êre (名誉) は束の間のものであることがほのめかされる。アルトゥース王一行が泉の国に一週間滞在し、やがて出発の時が来たとき、誠実なガーヴェインは、すなわち、妻の愛に溺れて騎士の名誉を失ったエーレクの例を引き合いに出して、得られた êre (名誉) を維持し長続きさせるためには新たな騎士としての修業を怠るべきではないと忠告するのである。そこでイーヴェインは、一年以上長く留守にしないことを誓う (swuor, 2929) ことで妻の了解を得、アルトゥース王の一行に加わって旅に出かけたのである。しかし、彼は騎士の活動に熱中しているうちに約束の期限を忘れてしまい、妻との誓約をないがしろにしてしまう。約束の期限も大分過ぎて、自分の怠慢に気がついたときは、もはや遅すぎた。あとを追って来た侍女ルーネテがアルトゥース王とその騎士たちの前で、イーヴェインが誓いを破った裏切り者 (verrätäre, 3118) であり、言葉と心持ちは別々 (3125-6) の不誠実な者であるとはっきりと言い渡す。罪 (die schulde, 3222) の意識で狂気となったイーヴェインは、礼儀も作法も忘れて、自分の衣服を引き裂き、すっかり裸となったが、これは宮廷社会からの追放であり、騎士的地位を失ったしるしだと解することができよう⁴¹⁾。誓約を破ることによって妻の愛と社会的地位を失ったイーヴェインは今や裸というあわれな姿で荒野をさまようのである。しかし、善なる神は彼を完全に見捨てたわけではなかった (vgl. 3261-3)。惨めながらも行く先々で救いの手が差し出され、イーヴェインには真の意味での êre (名誉) を求めて贖罪としての冒険の旅が今ようやく始まるのである。

2. イーヴェインの六つの冒険 — triuwe と erbarmen —

このようにイーヴェインがあわれな姿で荒野をさまようことになった直接の原因は、もちろんラウディーネとの誓約を破った罪にある。その後の彼の放浪生活も、獣と同じように、言語を使用できないという状況に陥ることによってその罪の償いにふさわしいのである⁴²⁾。彼がそれに

41) Vgl. H.Zurr: König Artus — Iwein — Der Löwe. Die Bedeutung des gesprochenen Wortes in Hartmanns Iwein (Tübingen 1979. S.60-1.

42) Vgl. ebd. S.62.

よって過ちを犯した言語は、今や彼から奪い取られており⁴³⁾、彼はもはや騎士ではなく、獣も同然の存在である。森の中で弓を持った一人の若者と出会ったときも、この狂人は言葉によってコミュニケーションをはかろうとする試みは全くしていない⁴⁴⁾。空腹に襲われると、野獣を射殺してそれをそのまま食べたり、射殺した野獣を隠者のところへ持って行ってその代わりとしてパンと水をもらって飢えをしのいでいたのである。こうして知力も衣服もなく惨めな暮らしを送っていたある日のこと、道の上に横たわって眠っていたイーヴェインは、そこを通りかかったナーリゾーンの女領主の秘薬によって目覚めるが、このイーヴェインの目覚めは、単なる挿話ではなく、アルトゥース・ロマンに本質的な「至福の道」(sælden wec) への決定的な過程であって⁴⁵⁾、作品にとっても重要な要素の一つである。イーヴェインは生まれ変わったのであり、その変身はこの作品ではまず言語を使用することによって表されている。秘薬によって目覚めたイーヴェインは、起き上がって自らに向かってまずこう言う。

《bistûz Îwein, ode wer?

hân ich geslâfen unze her?》

(3509-10)

「お前はイーヴェインなのか、それとも誰か。

私は今まで眠っていたのだろうか。」

騎士社会を追放されて以来初めて口に出したこのイーヴェインの言葉は、たとえ人間とのコミュニケーションのためではなく、独白として用いられているにしても、転換のしるしである⁴⁶⁾。この二行に続いて長々と続くイーヴェインの独白(3509-83; 3587-93)は、原作のクレチアンの作品には見られないハルトマン自身の創作部分であるが、詩人ハルトマンはイーヴェインに言語を使用させることによって主人公の騎士社会への復帰を表現している⁴⁷⁾のである。さらにナーリゾーンの婦人の計らいで彼の横に置いてあった衣服を身につけると、イーヴェインは騎士と同じ姿になったが、この衣服は——狂気となった彼の最初の行動が騎士の衣服を引き裂くことであったように——自己疎外が克服されたということのしるしである⁴⁸⁾。長い独白の中で過去の自分の行為を反省し、今や騎士の衣服を身につけたイーヴェインは、新たな騎士の道を見出したと言える。その道とはこれからイーヴェインが体験する六つの冒険である。これらの冒険において彼は不誠実な過去の自分に打ち克たなければならない。とりわけルーネテがアルトゥース宮廷の人々の面前で非難した「言葉(siniu wort, 3125)と心持ち(der muot, 3126)との不一致」を克服し

43) Vgl. ebd.

44) Vgl. ebd. S.61.

45) Vgl. Max WEHRLI: Iweins Erwachen.(1969) In: Hartmann von Aue (Wege der Forschung Band 359) Darmstadt 1973. S.493.

46) Vgl. H.ZUTT: a.a.O., S.62.

47) Vgl. ebd.

48) Vgl. ebd. S.66.

なければならない。不誠実な過去の自分との戦いが始まるのである。

第一と第二の冒険

まずその第一の冒険がナーリゾーンの婦人たちをアーリエルス伯の傲慢な侵入から解放することである。すなわち、秘薬で目覚めたイーヴェインは、そこを通りかけた使者のふりをした賢明な乙女に案内されて、ナーリゾーンの女領主の城へ赴くが、大歓迎を受けてそこでしばらく暮らしているうち、ある日のこと、軍勢を率いて押し寄せてきた傲慢なアーリエルス伯を相手に戦うのである。この戦いはイーヴェインの誉れとなって終わるが、この冒険はかつての泉の冒険とは性格が異なっていることが明らかである。イーヴェインは今や防衛者の役割を果たしているのであって、以前のような不法な攻撃者ではない⁴⁹⁾。しかもアーリエルス伯を以前のアスカローン王のときのように殺しはしない。捕えるだけである。さらに勝利を収めたイーヴェインは、かつてのラウディーネのように、その女主人より求婚されるが、それを拒否してしまう。それでもってラウディーネに対する真心を守ったと認められよう。イーヴェインは贖罪としての冒険の旅を続けるのである。

こうしてイーヴェインはナーリゾーンの婦人たちに別れを告げて馬に乗って進んで行くと、竜と獅子が激しく戦っているところに出くわすが、窮地に追いこまれていた高貴な獅子を救い出すのが第二の冒険である。救い出された獅子は、イーヴェインの足下に身をすり寄せ、動物にできる限りの愛着を示したが、獅子は窮地から救い出してもらった恩に対してできる限りの誠実 (triuwe) を示したと言えよう。以前身隠しの指輪で救い出してもらいながらそのルーネテの恩を裏切ることとなったイーヴェインのように不実 (ungetriuwe) とはならなかったのである。従って、獅子は誠実の象徴であり⁵⁰⁾、その行動はイーヴェインにとってはかつての罪に対する警告でもある⁵¹⁾。以後この獅子はイーヴェインを主人として従い、イーヴェインは名を語らずに「獅子を連れた騎士」(der riter mittem lewen) と呼ばれるが、どこにおいても彼のために尽くすこの獅子の誠実 (triuwe) によって彼は心を浄化されて内面的に成長することとなるのである。

第三と第四の冒険

こうしてイーヴェインが次に体験する第三と第四の冒険は、約束の期限を破ったかつてのイーヴェインの不実の罪に対する試練の決闘であると言える。まず彼は獅子と共に旅を続けるうち、運命の手に導かれて、愛するラウディーネの国へとやって来て、自らの罪に心を痛める。この罪の意識はこの場でこのあと獅子の誠実 (triuwe) に触れることによってさらに深まる。すなわち、

49) Vgl. Thomas CRAMER: Sælde und êre in Hartmanns Iwein. Euphorion 60, 1966. S.39.

50) Vgl. P.WAPNEWSKI: a.a.O., S.77.

51) Vgl. H.ZUTT: a.a.O., S.69.

妻の国へやって来て大変悲しくなったイーヴェインは、悲嘆のあまり心の力を失って、馬から落ちて地面に倒れたとき、剣が鞘走って、彼の甲冑を貫いて突き刺さったのであるが、流れ出る血を見て主人が死んだものと思った獅子は、自分も腹を刺して死のうとしたのである。そのとき身を起こしてその行為を中止させたイーヴェインは、この獅子の真の誠実 (rehtiu triuwe, 4005) に心打たれて、かつての自分がいかに不実 (ungetriuwe) であったかを悟り、愛しい女性の愛を自らの過ちのためにいともたやすく失ってしまったことを嘆くのである。この嘆きをまさにあのルーネテが聞いていて、ここで二人は再会するが、しかし、ルーネテは恐ろしい苦難にあっていて、イーヴェインの怠慢ゆえに、彼女が不実とされ、翌日の昼には死刑に処せられるというのである。イーヴェインの過失 (missetât, 4006) はルーネテの身にも影響を及ぼしていたのである。そこでイーヴェインは、彼女を訴えた内膳頭とその兄弟の三人と翌日決闘して彼女を救い出すという約束をする。この約束の戦いが第四の冒険であるが、この約束は、それを果たす前に体験する第三の冒険において彼の行動を時間的に制約することとなる。すなわち、ルーネテと約束したその日の夜に宿泊を求めた城で、城主 — その妻がイーヴェインの親友ガーヴェインの姉である — より悲惨な事情を聞いて、大変あわれに思った (erbarmen, 4740) イーヴェインは、翌朝ハルピーンという名の巨人と戦って城を窮地から救い出すことを約束する (geloben, 4776) のである。以前と違って、贖罪の旅を続ける今のイーヴェインには「憐れむ (erbarmen) 心」があるのである。しかし、夜が明けてイーヴェインは巨人ハルピーンを待ち受けるが、なかなか現われないので、彼は名誉 (êre, 4832) のことを心配し始める。もうルーネテのための決闘に出かけなければならない時刻なのである。そのために再び悲しくなった城主は、彼に財宝を差し出すことを口にして、なおも助力を願うが、イーヴェインは財産のために命を賭けるのではないことを強調する。彼の êre は財産に基づくものでないことが明らかである。悲しみで真っ青になった城主らは彼の親友ガーヴェインの名にかけて哀願するだけに、イーヴェインはますます苦境に陥り迷うことになる。

《sus enweiz ich mîn deheinen rât.
ich bin, als ez mir nû stât,
gunêret ob ich rîte
und geschendet ob ich bîte.
nune mag ichs beidiu niht bestân
und getar doch ir dewederz lân.
nû gebe mir got guoten rât.》

(4883-89)

「私はどうしてよいか、分からない。
私は、このままの状態なら、
出かけても不名誉の身となるし、
ここにいっても恥辱を受ける。
私は両方を為し遂げることはできないし、
さりとて両方を見捨てることもできない。
神よ、私によい教えを与え給え。」

イーヴェインにとってこのたびの約束の義務は、何としても取り消すことはできない。約束を破

ることはもはや二度と繰り返すことはできないのである。イーヴェインはこうして二つの義務の板挟みにはさまれて迷うのであり、一方を捨てて他方を行っても彼の名誉は破滅し、さりとて両方とも見捨ててしまえば、一生涯恥辱を受け続けるであろうというイーヴェインの懊悩は、『ニーベルンゲンの歌』のリュエデゲールの場合と同じである。しかし、表面的に同じなのであって、本質的には異なる。イーヴェインの場合、巨人が時刻通り現われるならば、彼は二つの約束を果たすことができるのである。事実、イーヴェインの待っていた巨人はそのあとついに姿を見せ、彼の迷いや嘆きは取り除かれたのである。誠実 (triuwe) とあわれみの心 (erbarmen) をもって困窮した人々のために援助の約束をしたイーヴェインには今や神の恵みがあったと言えよう。彼はすばやく戦いの用意を整え、巨人を目がけて突進して行った。二人の間には激しい戦いが繰り広げられるが、獅子の助けもあって、イーヴェインはついに剣で巨人の心臓のあたりを刺し貫くと、巨人は倒れて戦いは終わった。城の人々はみな喜び、城主は彼に休息して行くよう勧めたが、イーヴェインはすぐに暇乞いをした。ルーネテとの約束を守って誠実 (triuwe) を示さなければならなかったからである。

イーヴェインは急いで約束の場所に着くと、時刻はもう昼だったので、ルーネテはずでに引き出されていて、処刑寸前であった。ルーネテは跪いて祈り、もはや命はないものと諦めたとき、ちょうど救い手のイーヴェインが現われたのである。イーヴェインは時刻に関する最初の試練に見事に打ち勝つことができたのである。こうしてイーヴェインは内膳頭ら三人の屈強な騎士と激しい戦いをし、しかも愛しい王妃ラウディーネの面前で、三人の騎士を倒すことができた。ルーネテは非常に喜んだ。罪もなしに苦しい目に遭ってきた彼女は、王妃の寵愛を取り戻したからである。ルーネテのほかには誰にも名を明かさなかったイーヴェインは、ラウディーネに傷の治るまで彼女のもとに留まるよう懇願されるが、愛しい人の愛を取り戻すまでは安らぎも喜びもないことを告げてそこを立ち去る。今や王妃によって神の恵みに委ねられたイーヴェインは、最後の難関へと進み、ラウディーネの国においてだけではなく、アルトゥース宮廷でも真の騎士たることを実証しなければならないのである。

第五と第六の冒険

その最後の難関とは、アルトゥース王の面前で行われる親友ガーヴェインとの対決である。それはシュヴァルツ・ドルン伯の他界に伴って二人姉妹の間に生じた遺産相続をめぐる決闘であった。悪賢い姉は妹より先にアルトゥース王の宮廷へ行ってガーヴェインを味方につけていたが、しかし、それを誰にも話さないという条件つきであった。そこでイーヴェインは途方に暮れている妹の方の助力をする約束をし、ここについてイーヴェインとガーヴェインがお互いを知ることもなく、アルトゥース王の面前で相争うことになったのである。しかし、この最も困難な決闘の前に——ちょうど第三と第四の冒険のときと同じような構成になっており——イーヴェインはまたもや巨人、しかも今度は二人の悪魔の巨人と戦わねばならない。これが第五の冒険である。

すなわち、ガーヴェインとの決闘の約束をした日の晩に彼が宿泊した城で、彼は三百人の女たちが人質として惨めな生活を強いられているのを見てかわいそうに思った (erbarmen, 6407) が、彼女たちを解放するための戦いがそれである。翌朝二人の巨人と戦うが、このときにも獅子の助けがあって、二人の巨人を打ち倒し、三百人の女たちを解放することができた。その城主は自分の娘と国とを差し出すが、娘は大変美しい乙女ではあったものの、イーヴェインはそれを拒否し、ある婦人以外の夫にはならないことを口にする。ここでもラウディーネへの真心を守っていると考えることができよう。

イーヴェインはぐずぐずしてはいられなかった。第六の冒険としてガーヴェインとの決闘の時刻が近づきつつあったのである。イーヴェインは——このとき獅子を途中で残してきた——何とか遅れずにアルトゥース王の宮廷に現われた。時刻に関する二度目の試練をも克服したのである。ガーヴェインはすでに来ていたが、両者とも武具をつけていたため二人とも相手が誰だか分からない。この決闘ほどイーヴェインにとって困難なものはない。獅子の助けがないからではなく、勝っても負けても彼は名誉 (êre) を失うことになるからである。しかし、これまでの冒険で困窮した人々を助けるというあわれみ (erbarmen) の道を歩んできたイーヴェインには、先の場合と同じように神の恵みがあったと言ってもよい。朝に始まった決闘は、昼を過ぎても夕方となっても決着がつかないのである。翌日まで決着が延期されて休戦となったとき、両者は初めて言葉を交わすが、二人は言葉を交わすことによってお互い相手が誰であったかを知ったのである。このあと二人が自分の êre を犠牲にしてお互い相手の榮譽 (pris) を称え合っている光景はアルトゥース王に大変喜ばれることとなり、そこで遺産相続問題は全てアルトゥース王の判断に委ねられ、アルトゥース王の巧みな裁き方 (vgl. 7655-60) によって円満に解決するのである。こうして問題が解決したところへ、獅子が姿を現わし、それをもってイーヴェインが「獅子を連れた有名な騎士」(der degen mære mittem lewen, 7741-2) であったことが明らかとなり、その姉の城を窮地より救い出してもらっていたガーヴェインとその救い主イーヴェインとの間の友情がますます深まったことはもちろんのことである。今までの冒険で名前は明らかにせずに「獅子を連れた騎士」(der rîter mittem lewen) とだけ名乗っていたイーヴェインは、この最後の冒険で初めてイーヴェインと名乗ることのできる真の騎士となったのである。

3. 騎士の理想像 — sælde und êre —

このように見てくると、贖罪としてのイーヴェインの六つの冒険は、それ以前の不法な泉の国への冒険とは全く性質が異なっていることが明らかである。かつてカーログレナントの失敗談を聞いて出かけていったイーヴェインの泉の冒険は、理想的なアルトゥース騎士の「冒険」(âventiure) の概念規定に属している本質的な要素を欠いている⁵²⁾と言わなければならない。この泉の冒険での彼の行動は、六つの冒険と比較してみても明らかなように、ことごとく理想的騎士

52) Vgl. Th. CRAMER : a.a.O., S.34.

にふさわしいものではないからである。もともとその冒険が不法な性格のものとなったのも、結局はカーログレナントの失敗談をイーヴェインが正しく理解しなかったことに原因がある。従って、作品の最初に語られているカーログレナントの失敗談は、イーヴェインが騎士として未熟であり無知であったことを暴露することにも役立っている。イーヴェインは、すなわち、挑戦を通過することもなく⁵³⁾、ただ傲慢に利己的な名誉 (ere) を求めて出かけて行き、不思議な石に水を注ぐという行為によって不法にもその国の秩序を乱したのである。嵐がおさまって城から出て来たアスカローン王との決闘でも、イーヴェインは重傷を負って逃げるアスカローン王を「騎士の心得も忘れて」(âne zuht, 1056) 追いかけて無慈悲に殺害したばかりか、さらにはその国を護るために夫の殺害者と再婚する決心をした王妃ラウディーネの期待 (2066-72) をも裏切る結果となったのである。従って、イーヴェインの罪は、より詳細に言えば、彼がラウディーネの国に出かけて行ってその夫アスカローン王を無慈悲に殺害し、その国の秩序を乱したばかりか、暴力的に一人の女性とその国を手中に収めた上、さらにその女性を裏切ったということの中にあつたのであり、一言で言えば、「誠実と憐憫の情」(triuwe und erbermde) の欠如⁵⁴⁾ にあつたと言えよう。そのため贖罪の旅として続ける彼の六つの冒険では不誠実で無慈悲な過去の自分に打ち克たなければならない。その意味で六つの冒険は過去の自分との戦いであつたと言えよう。その六つの冒険で、アルトゥース宮廷騎士にふさわしい行為を自ら進んで示すことによって、今やイーヴェインはラウディーネの真の愛を得る資格ができたと言えるのである。しかし、誓いを破ることによって失った愛は、誓いによってしか得るすべはない。そこで最後にも重要な役割を演じているのが誓いのモチーフであり、賢明なルーネテの巧みな仲介によって、イーヴェインはラウディーネの明確な言葉による誓いから、彼女の、しかも今度は真実の愛を得ることになったのである。イーヴェインによって窮地から救い出されていた忠実な侍女ルーネテもイーヴェインに対してかつて誓っていた (geloben, 5554; geheizen, 5556) 恩を返したと考えることもできるのである。イーヴェインとルーネテとの間にも誓いのモチーフは認められるのであり、ここでも誓いはこの作品を貫く重要なモチーフであることが窺えよう。

このようにラウディーネの愛への道は、六つの冒険で経験したように、誓いを守り (triuwe)、困窮した者たちのため (erbarmen) に戦うという理想的なアルトゥース宮廷騎士の道でもあつたのである。言い換えれば、ラウディーネの愛への道 (ミンネ) とアルトゥース宮廷への道 (騎士道) は、二重の道ではなく、一つの道だったのである⁵⁵⁾。こうして誠実 (triuwe) とあわれみの心 (erbarmen) の行動によって正しい秩序の道を辿りミンネと騎士道の二つを調和させた今のイーヴェインには、神の恵みによってついに長続きする「至福」(sælde) と「名誉」(ere) とが得られ

53) 騎士と戦う場合には三日前に宣戦の通告をしなければならないのである。

(Vgl. ebd. S.35. また、郁文堂刊「ハルトマン作品集」275頁の註を参照のこと。)

54) Vgl. P.WAPNEWSKI : a.a.O., S.77.

55) Vgl. KURT RUH : Zur Interpretation von Hartmanns >Iwein<. (1965) In: Hartmann von Aue (WdF359) Darmstadt 1973. S.424.

たのである。主なる神は慈悲の心を持っている人に至福と名誉 (sælde und êre, 4855) を与えるものなのであって、この作品のプロローグの冒頭でも詩人ハルトマンはこう語っている。

Swer an rehte güete wendet sîn gemüete, dem volget sælde und êre. (1-3)	真に正しいものに 意を向ける者には、 幸福と名誉が与えられる。
---	---------------------------------------

このプロローグにおいてばかりではなく、エピローグにおいても語られている「至福と名誉」 (sælde und êre, 8166) を求めて生きる者は、「真の善」 (rehte güete, 1)、すなわち、誠実 (triuwe) であり慈悲の心 (erbermde) を持ち合わせた行為を行わなければならないのである。このように『イーヴェイン』は、題材はミンネと騎士道の調和という世俗的なものでありながら、宗教的な感情も多分に含まれている作品へと深化させられており、誓いのモチーフを整然と作品の中に組み入れながら、理想のアルトゥース騎士像を作り上げているところにこの作品の特質があると言えよう。『エーレク』ですでに示されていたハルトマンの理想の騎士像は、今や『イーヴェイン』において見事に為し遂げられるに至ったのである。

結 び

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』においてもハルトマンの二つのアルトゥース・ロマーンにおいても êre と leit という観念がとりわけ重要な役割を演じていることが理解できよう。ところが、この êre と leit は両者においては本質的に異なる性質のものであることも今や明白であり、またその相違は英雄叙事詩とアルトゥース・ロマーンとの間の相違をも明確に示している。

『ニーベルンゲンの歌』における êre は、すなわち、ことごとく悲劇的・宿命的な leit と結びついている。「位高き乙女の愛」を求めて旅立つジーフリトの êre が宿命的に leit をもたらすということは、冒頭の「鷹の夢」においてすでにほめかされている。グンテル王の求婚と対比的に描かれて名誉 (êre) あるものにまで高められたこのジーフリトの「高きミンネ」がやがて両王妃にそれぞれの leit をもたらし、この二つの leit の復讐がさらにのちに大きな leit をもたらすこととなるのである。『ニーベルンゲンの歌』はまさにこの二つの leit の復讐の物語であると言えるが、しかし、両者は本質的には異なっている。前編で展開されるプリュンヒルトの leit の復讐は「名誉」 (êre) の「侮辱」からなされたものであるのに対して、後編におけるクリエムヒルトの leit の復讐は愛しい夫ジーフリトを失った「悲しみ」からなされたものであり、その誠実な愛から復讐するという新しいモチーフこそはニーベルンゲンの詩人の最も固有な業績の一つであると言ってよいであろう。このジーフリトとクリエムヒルトの「愛」の世界と対立するのが、その仇敵ハゲネの「権力」の世界である。ブルゴント国の重臣ハゲネの心の中にあるものは常に êre、すなわち、

ブルゴント国王の声望 (Ansehen) であり、彼はその名誉 (êre) を護るため、前編ではジーフリトと対立し、後編ではクリエムヒルトと激しく対立する。ニーベルンゲン悲劇はまさにこのクリエムヒルトの「愛」のモチーフとハゲネの「権力」のモチーフが織り成す悲劇であるが、ハゲネはこの対決の中で êre を貫き通す。ハゲネの êre はまさにデモーニッシュなものに結びついており、ハゲネの êre あるところ常に悪魔が潜む暗黒の世界である。このハゲネの êre と異なって、リュエデゲールの êre は、なるほどキリスト教的基盤において成長してきた宮廷的な êre を持ち合わせているが、しかし、その êre の板挟みという最も辛い精神的葛藤の末に結局はハゲネと同じ êre の破滅に終わるのである。このように『ニーベルンゲンの歌』においては êre も結局は leit に終わってしまうのであり、ここにニーベルンゲンの悲劇的世界があるのである。

この『ニーベルンゲンの歌』における êre と leit に対して、ハルトマンのアルトゥース・ロマンにおける êre と leit は全く性質を異にしている。『ニーベルンゲンの歌』における leit は、すなわち、本質的には他人から加えられたもので、それがさらに別の leit を呼び起こすことによって、二つの leit の悲劇を展開させているのに対して、ハルトマンの作品における leit は、他人から与えられたものではなく、主人公の怠慢から生じたもので、しかもそれは心からの懺悔と善なる行為を通じて真の êre へと高められるのである。「はいたか」競技によって êre を得たかに見えたエーレクは、すなわち、妻のミンネに溺れて「騎士としての本務を忘れてしまう」(sich verliĝen) ことによって、自分に辛い leit (苦しみ) をもたらすが、その後積極的な試練によってその êre を回復することができるのである。またラウディーネの愛とその国を手に入れたことで êre を得たかに見えたイーヴェインも、親友ガーヴェインの忠告に従って騎士の修業の旅を続けるうちラウディーネとの約束を忘れて罪に陥り、それが彼に辛い leit (苦しみ) をもたらすものの、その後心からの懺悔と立派な善の行為を通じて内心から変身することによって、神の恩寵を得るまでに成長するのである。つまり、名誉 (Ehre) — 罪 (Sünde) — 苦悩 (Leid) — 懺悔 (Buße) — 神の恩寵 (Gnade) というイデー⁵⁶⁾ が支配しているハルトマンの作品の世界では、贖罪としての善の行いによって神の恩寵が生じ、騎士は再びその êre、しかもより純化され高められた永遠の êre を手に入れることができるのである。

このように両者の内的構造には明らかな相違が認められる。『ニーベルンゲンの歌』は、前編と後編とが見事な均整を保ちながら二つの leit の復讐の物語が展開してゆくのであり、この悲劇の二重構造の中に「飲びも結局は悲しみに終わる」(17,3; 2378,4) という宿命的なニーベルンゲン悲劇のテーマが示されているのである。『ニーベルンゲンの歌』の芸術的魅力はこの前編と後編とのコントラスト的緊張関係、さらには中世的なものと古代的なものとの緊張関係の中にあるのであって、ニーベルンゲンの詩人はその二つの要素を、あるときは融合させ、またあるときは対立させることによって自らのニーベルンゲン悲劇の世界を築き上げていったのである。このニー

56) Vgl. Friedrich MAURER: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954. S.9—10.

ベルンゲン悲劇の構造に対して、ハルトマンのアルトゥース・ロマーンにおいてもなるほど二部構成が認められて、後編のあらすじは前編の裏返しである⁵⁷⁾が、しかし、この裏返しは『ニーベルンゲンの歌』においては「より大きな破滅」であったのに対して、ハルトマンにおいては「より高いものへの調和的発展」である。前者が古代ゲルマン的英雄精神を讃える悲劇的世界であるとするれば、後者はキリスト教精神に支えられた宮廷的騎士の調和的世界である。まさにこの点に『ニーベルンゲンの歌』とハルトマンの『エーレク』及び『イーヴェイン』、つまりは「英雄叙事詩」と「アルトゥース・ロマーン」との間の本質的な相違があるのであり、アルトゥース・ロマーンが宮廷生活を個人的な立場から宗教的・倫理的に眺めているとするれば、『ニーベルンゲンの歌』はそれを民族の立場から歴史的・悲劇的に観ているのである。従って、『ニーベルンゲンの歌』の詩人はどうしても作者不明でなければならない。作者不明も詩人のイデーに属しているであり、英雄文学としてのこの作品の一つの形式なのである。アルトゥース・ロマーンにおいて習慣となっている作者の名乗りは個人的刻印を示すものであるのに対して、『ニーベルンゲンの歌』の作者不明は民族的精神の刻印を表すものである。この意識的な作者不明によって『ニーベルンゲンの歌』は民族的な所有となっているのである。『ニーベルンゲンの歌』は、このように一つの中世叙事詩へと発展していながら、なおも民族的な精神を潑刺と歌い上げているのである。そこそここの作品の真の価値があるのであり、まさにそのことによって『ニーベルンゲンの歌』は当時の中世文学の中であって、宮廷叙事詩とは本質的に異なる独自の一つの中世叙事詩として燦然たる光を放ち続けていると言えるのである。

*本研究は昭和63年度文部省科学研究費（奨励研究A）交付による研究成果の後半部分である。なお、研究成果の前半部分は——ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』——と題して本紀要第1巻に掲載している。

57) 『エーレク』においては主人公がミンネに溺れて名誉を失うまでを前編とすれば、その後の旅の物語は後編である。また『イーヴェイン』においても同様に主人公が騎士の活動に熱中してミンネを失うまでを前編、その後の冒険の旅を後編と考えることができよう。